
もう1つの智代アフター

坂上智代は俺の妻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう1つの智代アフター

【Nコード】

N8763M

【作者名】

坂上智代は俺の妻

【あらすじ】

CLANNAD二次創作

オリジナルキャラ紹介と注意事項（前書き）

俺と坂上智代の出会い〜今を描いた作品です。

最初に注意事項を書きましたので読む前に注意事項を見てください。

オリジナルキャラ紹介と注意事項

【CLANNAD】もう1つの智代アフター

注意事項

原作の設定と違う箇所や、実際の設定と異なる箇所が多々ありますが、それは物語の構成上の問題です。

岡崎でなくぐっち（俺）というオリジナルキャラが主役です。

そう言ったモノを受け付けない方はスルーしてください。

以上を了承した上でお読みください。

設定

名前：ぐっち

性格：ヘタレ、変態、オタク

職業：高校1年

家族構成：父、俺

その他：幼い時に母親を亡くしている。母が亡くなった理由は不明。今は父と二人暮らし。父が転勤の多い職についてる。父との仲は最悪。転校が多いので臨機応変スキルが高い。

オリジナルキャラ紹介と注意事項（後書き）

まだ続きます

First Contact

俺は属に言うアニメオタクというヤツだ。世界の汚さと、平凡な日常に退屈していた。

だから現実と違い綺麗で非日常的な二次元に憧れ、アニメオタクになったのは必然と言えるだろう。

現実の魅力あるモノなど存在しないと思ってた。彼女に会うまでは……。

今日は× 高校の入学式だ。

息を切らせながら、学校に向かう途中にある坂道を上る。

「!？」

絶世の美少女と言っても過言ではない美少女が物思いにふけってたたずんでいる。

桜舞う並木道に絶世の美少女。すごく絵になっていた。

俺はその美しさに心奪われてしまう。彼女と一緒に居れたら世界が色付くと思った。

だから、俺は……。

「好きです。一目惚れました。俺と付き合ってください」

思わず告白してしまう。別に見返りなど求めてない。

ただ、俺の気持ちを迷惑かも知れないが彼女に伝えたかった。返事など貰える訳がないと思う。どう考えても無視されて終わり。

しかし彼女は……。

「なっ!？」

酷く驚いた表情をしている。もしかして脈あり!？」

「……すまない。そういうのは興味ないんだ。他を当たってくれ」

無視されて当然なのに返事をしてくれた。その優しさで俺は更に彼女が好きになった。

だから、俺は……

視点変更

中学時代の私は荒れていた。目に映る全てが憎かったんだ。毎晩、出歩き不良相手に喧嘩をして鬱憤をはらしていた。いや、喧嘩というのは少し違うか……私が一方的に殴っただけだからな。最低な姉だったと思う。

でも、弟のお陰で立ち直ることが出来た。しかし、そのせいで弟は……。

私が考えごとをしていると、今まで感じたことのない視線を感じた。

その視線を辿ると冴えない男子生徒がいた。

制服を見るに私と同じ新入生だろう。

男が私に近付いてきた。

またか……正直うんざりする。だが、これは自業自得だ。全ては過去の私が起こしたことが原因だからな。

私は何時でも蹴れるように右足に神経を集中させた。

「好きです。一目惚れしました。俺と付き合ってください」 男の行動は私の予期したものと全く違っていた。

「なっ!?!」

生まれて初めての告白。ラブレターなら貰ったことがあるが直接言われたのは初めてだった。だから少しだけ動揺してしまう。

男は小刻に震えていた。勇気を振り絞り私に告白したのだろう。

見ず知らずの相手ではあるが誠意に誠意で返すべきだろう。「すまない。そういうのは興味ないんだ。他を当たってくれ」

だから、無視でなく返事を返すことにした。

このせいで私の人生が大きく変わることになるとは誰が想像出来ただろうか？

初恋と初恋？（前書き）

桜舞う景色の中で俺は彼女と出会った。彼女は美しい、その美しさは言葉で言い表せない。あえて言うならばヴァルキリー？

彼女に出会えたことは奇跡と言って……。

？「奇跡は起きないから奇跡って言うんですよ」

（・・・） によるーん

初恋と初恋？

こんな気持ちを感じたのは産まれて初めてだ。三次元に絶望して二次元に逃げた時に俺は三次元を捨てた。

三次元の優しさの裏にある汚さの打算や裏切りなどにうんざりしたからだ。世界は汚い、かくも醜い。三次元は灰色に染まっついて退屈だ。

その逆に二次元は打算や裏切りなどないし、俺にとって理想郷だった。二次元の世界は美しい、かくも素晴らしい。色々な色彩で彩られた世界。

それなのに、俺は今日三次元で二次元ですら感じたことのない感覚を感じた。

「すごく綺麗な女の子だったな……。あんな美少女が三次元に居るなんて……」

桜舞う並木道で出会った美少女。桜舞う中に一人物思いにふける美少女、その絵が凄く幻想的で美しかった。そして俺の心を一瞬で奪ったんだ。

名前は……。わからない。次また出会えたら聞いてみよう。

そして俺は彼女の彼氏になりたい。……。いや、どんな手段を使っても彼女が欲しい。

だが、彼女のことを無視したやり方は駄目だ。催眠、脅迫など論外だ。

彼女のままで手にしなければ意味がないし、そんな手段を使ったら彼女に嫌われてしまう。

相思相愛の関係になりたい。そうすると手段はかなり限られる。

俺は……。

どうすればいいんだ？ 生憎と女性と交際したことは元より、恋愛経験すらない。

「……ググるか」

俺はパソコンの電源を入れて「彼女の作り方」でグーグル検索することにする。

ラブレター。手紙で想いを伝える方法。

「彼女はそういうの好きじゃなさそうだな……」

脅迫。相手の秘密を調べて、それをネタに交際を迫る。

「犯罪とかワロス、ワロス。通報しますた」

催眠術。催眠術で相手を操る。

「操り人形は要らない。生身の彼女でなければ無価値だ」

グズ。恋愛運があがりません。

「そんなオカルト有り得ません！」

良いのがないな……。諦めて寝ようとした瞬間ある文字が目に入った。

それは……。

視点変更

入学式を済ませた私は病院に行く。ある人物のお見舞いをするためだ。

私のせいで大怪我をしてしまったと言っても過言ではない。

その昔、家族の仲が悪い四人家族（父・母・姉・弟）が居た。父親は浮気ばかりしていた。母親は母親で父親への当て付けか同様に浮気していた。姉は苛立ちを弟にぶつけて暴力を振るうこともあった。

……弟に暴力を振るうなんて最低な姉だと思う。

そして遂に家族の我慢は限界を越えて、終焉の時を迎える。

だが、家族が終焉の時を迎えることはなかった。弟の犠牲により……。

弟は唯一家族の大切さを理解していた。家族に家族の大切さを教えるために弟は車道に飛込んだ。

失う恐怖を味あわせることにより、家族の大切さを理解させる作戦だったらしい。

酷く愚かな作戦だ。だが、一番愚かなのはそんな作戦を取りざるを得ない状況にしまった家族だ。

家族は弟の犠牲により家族はやり直す機会を得れた。

父親と母親は不倫を辞めて、家族を大切にするようになる。姉は不良狩りを辞めて、夜の道をさ迷うことはしなくなった。

…… 本当に私は最低な姉だと思う。

私は入室の許可を得るため、個室のドアを叩く。

「どうぞ」

私はドアノブを回して押した。中学生くらいの男子がベットに居た。男の名前は「坂上鷹文^{さかがみ たかふみ}」という。私の弟だ。

「調子はどうだ？」

「特に問題ないよ。姉ちゃんもわざわざ見舞いに来なくて大丈夫だから」

「そんな訳にはいかない」

鷹文がこうなってしまうたのは私が原因でもあるのだから……。

「本当に大丈夫だからさ。そんなんじゃ彼氏とか出来ないよ」

「彼氏？ 別に興味ないな」

いや、それは嘘か…… 少しは興味がある、私も女の子だからな。

だが、鷹文がこんな状態の時にそういったうわついたことは考えたくないし…… できない。

「…… もしかして責任感してるの？」

「そ、そんなことはないぞ」

凶星だった。

「僕、嫌だよ」

「何がだ？」

「僕のことを気にして彼氏作らないとかだよ。姉ちゃんには幸せになつて欲しいんだ」

…… そんなの出来る訳がない。私だけ幸せになるなんて……。

「……」

「ハア…… 彼氏が出来るまで姉ちゃん見舞い禁止ね」

溜め息を吐きながら、とんでもないことを言う鷹文。

「な、それは横暴だぞ」

「姉ちゃんも美人だから直ぐ彼氏出来るよ」

うん、実は容姿だけなら自信がある。……って、今はそんな話してる場合じゃないな。

「好きな人が居ないんだが……」

「じゃあ、気になる人は？」

「……居ない」

嘘だ。本当は少しだけ気になる男が居る。今朝あった変な男が浮かんだ。でも、恋愛感情は全くないぞ。

「嘘だね。姉ちゃん、嘘付くと目が泳ぐもん」

私にそんな癖があったなんて知らなかった……。

「うつ……だが恋愛感情は全くないぞ」

「とりあえず付き合ってみれば？」

「それは相手に失礼だろう」

「じゃあ、見舞い禁止ね」

「うつ……それは困る」

……私はどうすれば良いんだ。

「面会時間終了です」

看護師さんが面会時間の終了を知らせる。

「……」

見舞い禁止を受け入れる訳にはいかない。……あの変な男と交際するしかないのか。

だが、交際と言っても今日振ったばかりなのだが……。それなのに私の告白を受け入れてくれるだろうか。うつ……。私はどうすれば良いんだあ。

視点変更

僕は病院の個室のベッドの上に居る。足の治療のために入院している。この程度の怪我で済んだのは医者曰く奇跡らしいね。

こう言うとき軽い怪我に聞こえるかな？ 怪我だけのことを言うなら軽くない、寧ろ重い方だと思うよ。

僕は車道に飛込んだんだ。命すら失ってもおかしくはなかった。酷く愚かな行為だと、僕自身も理解していた。でも、僕にはその手段が残されていなかったから……。

結果、僕は車に跳ねられた。医者の迅速な対応により命は助かったけど……複雑骨折の全治一年という大怪我をしてしまう。

沢山の人達に迷惑をかけたことは反省している。でも、後悔はしてないよ。……例えばこの命を失っても構わなかった、それで家族を守れるなら……。

アイツらには悪いことをしたと思うけど……。もう、僕は大好きな彼女と会うことは許されないだろう……。それだけのことをしたのだから……。

個室のドアを叩く音が聞こえる。また、姉ちゃんかな？

「どうぞ」

やっぱり、姉ちゃんだった。

「調子はどうだ？」

「特に問題ないよ。姉ちゃんもわざわざ見舞いに来なくて大丈夫だから」

姉ちゃんは頻繁に僕の見舞いに来てくれてる。もしかして責任を感じてるのかな？ ……別に姉ちゃんは悪くないのに……。

「そんな訳にはいかない」

「本当に大丈夫だからさ。そんなんじや彼氏とか出来ないよ」

「彼氏？ 別に興味ないな」

「……もしかして責任感じてるの？」

姉ちゃんの重荷になりたくなかった。姉ちゃんには高校生活を満喫して、幸せになって欲しいんだ。

「そ、そんなことはないぞ」

姉ちゃんは視線を泳がせた。これは姉ちゃんが嘘を付くときの癖だ。

「僕、嫌だよ」

「何がだ？」

「僕のことを気にして彼氏作らないとかだよ。姉ちゃんには幸せになつて欲しいんだ」

「……」

姉ちゃんは頑固だから……。だから、僕は強攻手段に出る。

「ハア……彼氏が出来るまで姉ちゃん見舞い禁止ね」

彼氏が出来れば僕のことを忘れて、高校生活を満喫出来ると思つたんだ。

「な、それは横暴だぞ」

「姉ちゃんは美人だから直ぐ彼氏出来るよ」

弟の鼻屑目なしでも姉ちゃんはかなり美人だと思う。性格はアレだけど……。

「好きな人が居ないんだが……」

「じゃあ、気になる人は？」

「……居ない」

また、視線が泳いだ。へえ、気になる人は居るんだ……。姉ちゃんが気になる人つてどんな人かな？ 凄く会ってみたいや。

「嘘だね。姉ちゃん、嘘付くと目が泳ぐもん」

「うつ……だが恋愛感情は全くないぞ」

「とりあえず付き合つてみれば？」

「それは相手に失礼だろう」

姉ちゃんみたいな美人と付き合えるなら、それだけで満足じゃないかな？

「じゃあ、見舞い禁止ね」

「うつ……それは困る」

「面会時間終了です」

看護師さんが面会時間の終了を知らせる。

姉ちゃんは無言で部屋を出る。

姉ちゃんが気になる人ってどんなイケメンかな？
とっても楽し
みだよ。

初恋と初恋？（後書き）

私の駄文を最後まで読んで下さりありがとうございます。
続きも頑張って書きますので良かったらまた読んで下さい。
気軽に感想・アドバイスなど頂けたら幸いです。

偽りの関係

俺は昨日より早く家を出た。例の彼女を待ち伏せするためだ。そして再度、告白する。

昨日と同じように息を切らせ、坂道を上る。やっぱり徒歩は辛いな……せめて自転車が欲しい。そんな下らないことを考えながら坂道を上りきると……。

「あっ」

昨日と同じ場所に彼女が居た。

「……」

彼女と視線が合う。彼女は何故か頬をりんごのように赤く染めている。

「おはよう」

とりあえず挨拶をすることにした。

「……おはよう」

彼女は戸惑いながらも挨拶をする。何か様子が昨日と違う気がする。気のせいかな？

もしかして脈あり？ ははは……まさかね。でも、俺は付き合ってもらえるまで諦めないぞ。

昨日ググツタサイトに恋愛の秘訣は「諦めないことと」あったからな。

昨日の失敗はいきなり告白したからだろう。だから、まずは世間話から……。

「実はお話がありました……今、時間大丈夫ですか？」

「……あなたに話したいことがあるのだが少し時間を私にukれないか？」

二人の声が重なる。

「あ……先にどうぞ」

「いや、私の用事はそんなに大したことじゃないから……先にあな

たから言ってくれ」

お互い譲り合う。これじゃあ、ラチがあかない。しかも、時間は限られている。学校をサボる訳にはいかないからな。

「ここはレディーファーストってことで」

「そうか……なら」

そう言っただけで彼女は俺の提案を受け入れた。

「その……実は　って、やっぱり言えない……！」

突然、顔面に今まで感じたことのない痛みが襲う。この痛みは言葉で表せない。そして俺の体が宙に浮かび一瞬だが地上の者でなくなった。

「っ……」

俺は彼女に殴られたのだとやっと理解した。普段なら痛みで情けない声をあげて泣いただろうが……彼女に情けない姿を見せたくないから我慢した。

……何で俺は殴られたの？　意味がわからない。

「すまない。つい……」

彼女はすぐく申し訳なさそうな顔をして謝罪した。

「……大丈夫だから」

ヘタレな俺だけど精一杯強がって笑ってみせた。彼女に悲しみは似合わないから。

「そうか……良かった。……やはり、私の話は少し言い辛いことだからあなたから先に話してくれ」

「わ、わかったよ」

もう殴られたくないし……。

とりあえずどうでも良い世間話をした。彼女は真面目に俺の話を聞いて、時折相槌を打ってくれた。

結構良い感じ？

「今だ告白しろ！」

「まだ早いです」

脳裏に天使と悪魔が浮かび、争いを始めた。俺は……。

「昨日振られたけどやっぱり諦められません。簡単に諦めるような告白なんてしませんし……。その……俺と付き合って下さい」

悪魔が勝利した？

「……突然が駄目でしたら先ずは友達からでも……」

この台詞は聞こえないように小声で言った。ヘタレスキル発動である。

「……ああ、私で良ければ構わないぞ」

うんってイイエって意味でしたよね？ まさかの回答に頭が回らなくなる。

「やっぱり……駄目か。でも、俺は諦めないから！ 君の気が変わるまで待つよ」

駄目元の告白とはいえ、やはり振られるのは辛い。俺は涙が出そうなのを我慢した。彼女にみつともない姿を見せるのは嫌だから。

「いや……あなたは何を言ってるんだ？ 私は承諾したじゃないか。

……もしかして、私をからかったのか？」

何故かドス黒いオーラを感じる。もしかして死亡フラグ？

「いや、俺は本気さ。……って、……まさかOKなの！？ 俺の恋人になってくれるの？」

「……さつきからそう言ってるじゃないか」

彼女は呆れた感じで俺を睨む。

「ごめん。……まさかOK貰えると思えなくて……。これ夢じゃないよね？」

彼女が俺の頬を突然つねった。

「何？」

「痛いだろう？ なら夢じゃないぞ」

彼女はそう言って微笑んだ。その笑みは天使のように可愛い。可愛い、凄く可愛い。こんな可愛い娘の彼氏になれるなんて俺は世界一の幸せ者だ。

「……今更かも知れないけど名前教えてくれないか？」

「本当に今更だな。普通順序が逆だろう。それに名前を聞く時は先

ず自分から名乗るのが礼儀じゃないのか？」

彼女の言う通りだ。名前も知らずに彼氏彼女になるなんて聞いたことがないし、これから先も聞くことがないだろう。

「ごめん、俺の名前は朝倉ぐつち」

「私の名前は智代。坂上智代だ」

智代って言うのか……。外見と同じで可愛い名前だな。

「呼ぶ時は何て呼べば良い？」

「智代で構わないぞ。私もぐつちって呼ぶからな」

呼び捨て許可来たー！ でも、ちょっと恥ずかしいな。

授業開始5分前のチャイムが聞こえた。

「じゃあ、改めて……。その、よろしくな。智代」

「うん。……今日学校終わったら私と一緒に行って貰いたい場所があるんだが……」

「別に構わないけど」

「そうか……。良かった。放課後迎えに行くからそれまで待っていて欲しい」

「了解」

あれ、呼び返してくれないのか……。やっぱり智代も恥ずかしいのかな？ それよりデート楽しみ。

こうして俺と智代は他人から恋人の関係に変わった。嬉し過ぎて今夜は興奮して寝れないかもしれない。

視点変更

私は昨日より早く家に出た。鷹文に言われたことを実行するためだ。

はっきり言って彼に恋愛感情は全くない。しかし、鷹文に言われたから嫌々と言う訳でもない。

……私を女の子として扱ってくれて嬉しかった。荒れてた中学時代のせいでも私のことを女の子として扱ってくれる人間は皆無に等

しい。少なくとも地元には居ない。

だが、これは自分でしたことが原因だ。つまり、自業自得である。だから、私を女の子として接してくれたのがすごく嬉しかった。だから、彼を選んだ。

昨日と同じ場所で名前も知らぬ彼を待つ。彼は私の告白を受け入れてくれるだろうか？ 一度振られた相手から告白なんて怪しまれてしまうんじゃないか？ 色々な不安が脳裏に浮かぶ。すごく不安だ。

「あっ」

疲れた顔をして坂を上る彼が私の視界に映る。

「……」

彼と視線が重なる。まだ心の整理出来てないのに……。

「おはよう」

彼が私に挨拶をしてきた。

「……おはよう」

私は動揺を抑えながらも挨拶を返した。

「……あなたに話したいことがあるのだが少し時間を私に出来ないか？」

「実はお話がありました……今、時間大丈夫ですか？」

二人の声が重なる。

「いや、私の用事はそんなに大したことじゃないから……先にあなたから言ってくれ」

「あ……先にどうぞ」

またふたりの声が重なる。お互い譲り合う。気まずい空気が流れる……。

「ここはレディーファーストってことで」

「そうか……なら」

まだ心の準備が出来てないが……この気まずい空気を何とかしたい。私は彼の提案を受け入れる。

「その……実は……って、やっぱり言えない……!」

こんな恥ずかしいなと言えるかあああー！！！！
私は恥ずかしさに耐えられず彼の顔面を殴ってしまう。

「っ…………」

彼は殴られた襲撃で宙を飛び桜の木にぶつかる。

「すまない。つい…………」

また…………やってしまった。

「…………大丈夫だから」

彼は目に涙を浮かべながら痩せ我慢をする。…………卑怯かも知れないが私はその優しさに甘えることにした。

「そうか…………良かった。…………やはり、私の話は少し言い辛いことだからあなたから先に話してくれ」

「わ、わかったよ」

彼は突然、世間話をし始めた。何故このタイミングで？ 疑問におもいながらも彼の話を黙って聞いた。

「昨日振られたけどやっぱり諦められません。簡単に諦めるようなら告白なんてしませんし…………。その…………俺と付き合って下さい」

意味が良くわからない告白をされた。だけど都合が良かったから受けることにする。

「…………ああ、私で良ければ構わないぞ」

「やっぱり…………駄目か。でも、俺は諦めないから！ 君の気が変わるまで待つよ」

…………もしかして彼は病気なのか？ 彼の言おうとしてることが全く理解出来ない。

「いや…………あなたは何を言ってるんだ？ 私は承諾したじゃないか。…………もしかして、私をからかったのか？」

もしかしてからかわれたのだろうか？ 酷い、酷すぎるぞ。こんな嘘は悪質すぎる…………。

「いや、俺は本気さ。…………って、…………まさかOKなの！？ 俺の恋人になってくれるの？」

どうやら彼は日本語が駄目らしい。

「……さっきからそう言ってるじゃないか」

「ごめん。……まさかOK貰えると思えなくて……。これ夢じゃないよね？」

私は彼の頬をつねった。私を不安にさせた仕返しだ。次はないかな……。

「何？」

「痛いだろう？　なら夢じゃないぞ」

「……今更かも知れないけど名前教えてくれないか？」

「本当に今更だな。普通順序が逆だろう。それに名前を聞く時は先ず自分から名乗るのが礼儀じゃないのか？」

「ごめん、俺の名前は朝倉ぐっち」

「私の名前は智代。坂上智代だ」

ぐっちって言うのか……。あだ名みたいな名前だな。

「呼ぶ時は何て呼べば良い？」

「智代で構わないぞ。私もぐっちって呼ぶからな」

同じ年だから普通に呼び捨てで構わないと思うのだが……。わざわざ聞くほどのことなのだろうか？

「じゃあ、改めて……。その、よろしくな。智代」

何故か照れる、ぐっち。何か恥ずかしいことでもあったのだろうか？

「うん。……今日学校終わったら私と一緒に行って貰いたい場所があるんだが……」

彼氏を作るのは鷹文を安心させて、見舞い禁止を解いて貰うのが本当の目的だからな。ぐっちには悪いが……。

「別に構わないけど」

「そうか……。良かった。放課後迎えに行くからそれまで待っていて欲しい」

「了解」

こうして私とぐっちは他人から恋人になってしまった。やはり恋愛感情もないのに付き合うのは失礼だと思う。でも見舞い禁止を解

くためだから仕方ない。勿論、ぐつちを好きになるよう努力するつもりだ。

私のせいで弟は入院したのだからどんなことをしても償なわなければならぬんだ。そのためなら私はどんなことでもすると誓ったのだから……。

卑怯者

放課後。普段なら家に帰るが智代と約束したから帰らずに学校に残っている。

付き合っただけでデートするのは少し早い気がするけど……智代とデート出来るならそんなことは些細な問題だ。

智代みたいに可愛い女の子とデート出来るなら男なら誰でもそう思うに違いない。しかも、俺は三次元で女の子とデートした経験はないから尚更だ。

でも、行き先はやはり男が決めるべきだよな。時代錯誤な考えかもしれないけど男が女にリードされるのはカッコ悪いと思う。

「ぐつち、待たせてすまない」

智代が俺を迎えにきた。

「いや、そんなに待ってないから大丈夫。それに終わり時間は先生次第だから智代が気に病む必要はないよ」

「そうだな。早速が行こうか」

リードするのは男の仕事だよな。

「そうだね。とりあえず商店街にでも行ってみないか？」

商店街に行けば映画館や喫茶店などのデートスポットが沢山ある。「すまないが……行きたい場所があるんだ。ぐつちも私と一緒に来て欲しい」

行きたい場所があるならリード出来なくても仕方ないな。

「良いけど……何処に行くの？」

「あまり時間がないから移動しながら説明したい」

急ぎの用事なのか……いったい何なのだろうか。想像すら出来ない。

「わかった。移動しながら説明してくれ」

俺達は学園を出る。

「何処に行くの？」

「病院だ」

誰かの見舞いだろうか？ それとも智代は持病持ちでその診断をして貰いに行くのか。しかし、俺がついて行く意味はあるのか？

「何のために？」

「……私の大切な人が入院してるんだ」

……え？ 大切な人って……まさか彼氏？ そりゃ、こんなに可愛いだもの彼氏の一人や二人居ても不思議はないよな。寧ろ居ない方がおかしい。……なら、何で俺の告白を承諾したんだ？

……浮気相手ってことなのか？ 浮気は良くないことだ。でも、俺はもう智代なしでは生きていけない。俺はどうすればいいんだあ？

「着いたぞ。ここがそうだ」

どうやら目的地に着いたみたいだ。病院に入り、智代は個室のドアを叩いた。

「どうぞ」

中から声がして入室を許可した。

「俺は外で待ってた方が良いよな？」

トラブルはなるべく避けるべきだろう。

「いや、一緒に来てくれ」

……大切な人とは元カレで今カレを使って別れる作戦なのか？
なら……。

「智代は俺が幸せにするから安心しろ。だから、早く智代のことは忘れてくれ」

俺は中に居る男に告げた。男というよりは男の子が妥当かも知れない。多分まだ中学生くらいだろう。智代はショタ趣味だったのか……。

「へ？」

「は？」

彼と智代は「何言ってるのこの人？」と、いった感じで呆れた顔をしている。

「えーと、君は智代の元カレなんだよね？」

「……いや、ただの姉と弟ですよ」

彼は必死に笑いたいのを耐えてる。

「……マジ？」

この程度の失敗は誰にでもあるよな、人間だもの。

「ああ、鷹文は私の弟だ。というよりどうすればそんな間違いをす
るんだ？」

穴があつたら入りたいとは正にこういう状況だろう。

「智代が大切な人って言うから……」

俺は悪くない！

「大切な弟だ」

「いやあ」

大切と断言する姉と照れる弟。とりあえずブラコンとシスコンな
のは間違いないな。

「どうせ、俺は馬鹿ですよ」

その馬鹿さつぷりはDQNも裸足で逃げ出すくらいさ、多分。

「ああ、それは間違いない」

「うん、そうだね」

肯定する二人。少しはフォローしてくれよ。恋人なんだからさ……。

「姉ちゃん、変わった趣味してるんだね。姉ちゃんは面食いだと思
ってたからちよつと意外だよ」

……どうせ不細工ですよ。ああ、産まれてから一度もモテた経験
ないさ。悪いやつ！ イケメン爆発しろ！

「うん、自分でも何故ぐつちを選んだのかはわからない。顔だって
イマイチだし、名前以外はほとんど何も知らない相手だからな」

だよな……。本当に謎だよ、何で智代は俺なんかと……。

「……僕が彼氏作れって言ったからなの？ 姉ちゃん自身は……。
それなら無理に……」

ん、どういう事？ 彼は意味がわかんないことを言った。いや、

この言い方は違うか……。

幾等、馬鹿でもこの告白を受けたのは裏があると気付く。ただ、その可能性を認めたくなくて……目を気付かないふりしてただけだ。

「……確かにそれもある。でも、それだけじゃない」

「どんな理由があるの？」

彼は智代に質問した。とても真剣な目をしている。

智代は俺の方を向く。

「……少し席を外してくれないか。お前には聞いて欲しくないんだ。……時が来たら説明するから、今は……」

いや、それは……。だが、理由を聞いたら智代との関係が終わってしまう気がする。

卑怯かも知れないけど壊れるくらいなら偽りの関係を選びたい。

だから、俺は……。

「わかったよ。外に出てるから話が終わったら呼んでくれ」

「ああ」

俺は外に出る。

時の流れが遅く感じる。楽しいことがあると時間の流れが早く感じて、退屈だと時間の流れが遅く感じる現象効果だろうか？

実際は場所により時の進む早さが違うなんて有り得ないことだ。

時差により時間は狂うが、時の進む速度が変化してる訳ではないからな。

ならば何故、時の進む速度に変化があるように感じるのだろうか

？ それはテンションにより感受性が変化するからだ。

などと、いい加減なロジックを組み立ててたら……。

「終わったぞ。もう入って大丈夫だ」

智代が呼びにきた。

中に入ると、先程までの変な空気が嘘のように晴れてる。

「そう言えば自己紹介がまだだったよね。僕は姉ちゃんの弟で鷹文っていうんだ。よろしくね、ぐっち兄ちゃん」

自己紹介する鷹文。結構、気安い感じなんだな。智代とは正対な感じがする。

……自己紹介されたら自分もしないとだよな。

「俺は……」

「良いよ、姉ちゃんに聞いたから」

どんな紹介されたんだろうか……。まあ、紹介済みなら良いか。

「面会時間終了ですよ」

看護婦さんが……。あの言い方は駄目なんだったな。理由は知らないけど。訂正、看護士さんが面会時間の終了を知らせる。

俺達は病院を出る。

「……」

気まずい雰囲気。わかつては居たけどやっぱりシヨックだ。智代は俺のことが好きじゃなくて鷹文に言われたから付き合ってるだけという、裏を知ってしまったから。

「……理由を聞かないのか？」

沈黙に耐えきれなかったのか、智代が俺に話かけてくる。

「言いたくなさそうだから……無理に聞くつもりはない」

これは嘘だ。本当は単にこの関係が壊れるのが怖いだけだ、例えばこれが偽りだとしても……。

「そうか……。でも、これだけは言わせてくれ。確かに鷹文に言われたからお前の告白を受けた。お前に対して恋愛感情は全くない」
ははは、やっぱりそうなんだ。肯定して欲しくなかったな。

「……」

本当は男なら言うべき言葉があるんだろう。でも、それを言ったら終わってしまう。だから無言を選択した。

「……すまないことをしたと思う。謝って許されることじゃないのもわかってる」

……終わりだ。もう止めてくれ。わかったから、これ以上は聞きたくない。

「……いや、偽りの関係でも恋人になれて嬉しかったよ。だから、気にしないで良いから……」

目に熱いものがこみ上げてくるけど必死に我慢した。ここで泣いたら惨めすぎるから……。

「……許してくれるのか？ こんな酷いことをしたのに……。優しくいんだな。なら、私もお前のこと好きになるよう努力する」

智代は握り拳をつくり小さくガッツポーズをした。

え、好きになる？ もしかして……。

「俺達、別れるんじゃないの？」

智代は肩を落として、落胆する。

「……ぐっちは私と別れたいのか？」

智代と交際続けられるなら、俺は例え悪魔にだって魂を売る。世界中全てを敵に回しても構わない。

「別れたくない！」

「そうか……良かった」

愛してないという相手と付き合うのはおかしいと思う。だが、そんなのは些細なことだ。智代と別れることに比べたら……。

プライド、何ソレ食えるの？

視点変更

放課後。HRでの先生の話がとても長く予定したよりかなり時間が経過してしまった。

ぐっちは待つて居てくれるだろうか？ 不安な気持ちを胸に抱き

ながらぐっちの待つ教室へと急ぐ。

「ぐっち、待たせてすまない」

良かった、待っていてくれた。

「いや、そんなに待つてないから大丈夫。それに終わり時間は先生次第だから智代が気に病む必要はないよ」

それはそうだが、待たせてしまったことには変わらない。でも、

ここでそれを論議する時間はない。だから、ぐっちの優しさに甘えることにした。

「そうだな。早速だが行こうか」

「そうだね。とりあえず商店街にでも行ってみないか？」

ぐっちが私に提案した。

「すまないが……行きたい場所があるんだ。ぐっちも私と一緒に来て欲しい」

ぐっちは残念そうな顔をした。そんなに商店街に行きたかったのか……申し訳なくて少し胸が痛む。

「良いけど……何処に行くの？」

「あまり時間がないから移動しながら説明したい」

「わかった。移動しながら説明してくれ」

私達は学園を出る。

「何処に行くの？」

ぐっちは再度質問した。

「病院だ」

「何のために？」

「……私の大切な人が入院してるんだ」

何故かぐっちは肩を力なく落として、今にも泣き出してしまいそうな顔をする。

少し気になるが今は時間が惜しい。

病院に到着する。

「着いたぞ。ここがそうだ」

私達は病院に入る。私は個室のドアを叩いた。

「どうぞ」

中から鷹文の声がして私達の入室を許可した。

「俺は外で待ってた方が良いよな？」

それは困る。一緒に来て約束を果たしたことを証明しなければ私は鷹文の見舞いが出来ないからな。

「いや、一緒に来てくれ」

ぐっちは複雑な顔をした。

「智代は俺が幸せにするから安心しろ。だから、早く智代のことは忘れてくれ」

ぐっちは病気なのだろうか？ 私にはぐっちの思考が理解出来ない。

「へ？」

鷹文は「何言ってるのこの人？」と、いった感じで呆れた顔をしている。同感だ。

「えーと、君は智代の元カレなんだよね？」
ただの弟だ。

「……いや、ただの姉と弟ですよ」

鷹文は必死に笑いたいのを耐えている。

「……マジ？」

ぐっちは私の方を向いて、私の目を見つめる。

「ああ、鷹文は私の弟だ。というよりどうすればそんな間違いをするんだ？」

説明を聞いても理解出来ないと思うがな。

「智代が大切な人って言うから……」

「大切な弟だ」

「いやあ」

鷹文は何故か照れた。

「どうせ、俺は馬鹿ですよ」

床にのの字を書いていじける、ぐっち。

「ああ、それは間違いない」

「うん、そうだね」

自覚はあったんだ……。少しだけ安心したぞ。

「姉ちゃん、変わった趣味してるんだね。姉ちゃんは面食いだと思ってたからちよつと意外だよ」

「うん、自分でも何故ぐっちを選んだのかはわからない。顔だって

イマイチだし、名前以外はほとんど何も知らない相手だからな」

私にも理由はわからない。ただ……。

鷹文は真剣な目で私を見つめる。そして眉を下げ悲しそうな顔をした。

「……僕が彼氏作れって言ったからなの？ 姉ちゃん自身は……。それなら無理に……」

確かに鷹文が原因だ……。でも、それだけじゃない。だから、そんな顔はしないでくれ。

「……確かにそれもある。でも、それだけじゃない」「どんな理由があるの？」

私はぐっちの方を向く。

「……少し席を外してくれないか。お前には聞いて欲しくないんだ。……時が来たら説明するから、今は……」

説明するには昔の話をしなければなくなる。この話はまだぐっちには聞いて欲しくないんだ。……少しでも長く女の子として扱って欲しい。私の過去を知ってしまったえばそれは叶わなくなるから……。

「わかったよ。外に出てるから話が終わったら呼んでくれ」

「ああ」

ぐっちは外に出る。

……昔の私は荒れていた。だから昔を知る人間で私のことを女の子として扱う人間は居なくなってしまった。勿論これは事項自得なんだが。

「女の子として扱ってくれるんだ。あと、面と向かって告白されたのは初めてだった」

ラブレターなら何度か貰ったことはあるがな。

「……それだけ？」

鷹文は呆れた顔をする。

「……私にとっては大切なことなんだ。それにぐっちは私だけを愛してくれそうだから……」

あの人達と同じ過ちだけは絶対にしたくなかった。

「……姉ちゃんはそれで幸せになれるの？」

鷹文は今まで見たこと無いくらい真剣な目をした。

「……それはわからない。未来なんて誰にもわからないからな。でも、二人ならどんな苦難も乗り越えられる気がするんだ。」

証拠や理由なんてないがそんな気がする。

「そっか……姉ちゃんが良いなら僕は良いと思うよ」

「というか……鷹文が付き合えって言ったんじゃないか」

「そうだったね」

子供のような笑みを見せる鷹文。私も釣られて笑ってしまう。
それからぐつちについて鷹文に話した。

「あ、待たせっぱなしじゃん。うわ……あれから一時間以上経ってるよ」

鷹文が時計を見ながら言った。少し話が弾みすぎたようだ。

私は急いでぐつちを呼びに行く。

「終わったぞ。もう入って大丈夫だ」

良かった、怒ってないみたいだ。

「そう言えば自己紹介がまだだったよね。僕は姉ちゃんの弟で鷹文っていうんだ。よろしくね、ぐつち兄ちゃん」

自己紹介をする鷹文。

「俺は……」

「良いよ、姉ちゃんに聞いたから」

「面会時間終了ですよ」

看護師が面会時間の終了を知らせる。

私達は病院を出る。

「……」

気まずい雰囲気。

「……理由を聞かないのか？」

沈黙に耐えきれず、ぐつちに質問する。

「言いたくなさそうだから……無理に聞くつもりはない」

ぐっちは優しいな。でも、甘える訳にはいかない。

「そうか……。でも、これだけは言わせてくれ。確かに鷹文に言われたからお前の告白を受けた。お前に対して恋愛感情は全くない」
「……」

ぐっちは今にも泣きだしてしまいそうだ。罪悪感で胸が苦しくて吐いてしまいそうだ。

「……すまないことをしたと思う。謝って許されることじゃないのもわかってる」

身勝手だけど許して欲しい。

「……いや、偽りの関係でも恋人になれて嬉しかったよ。だから、気にしないでいいから……」

こんな酷いことをした私を許してくれるなんて……。ぐっちは何て器が大きいんだろう。もし、逆の立場なら……。私なら絶対に許さない。

「……許してくれるのか？ こんな酷いことをしたのに……。優しいんだな。なら、私もお前のこと好きになるよう努力する」

私は嬉しくて握り拳をつくり小さくガッツポーズをした。

「俺達、別れるんじゃないの？」

……どうしてそうなるんだ？

「……ぐっちは私と別れたいのか？」

「別れたくない！」

「そうか……。良かった」

ぐっちのことを好きになるよう頑張るぞ。……でも、どうすれば良いのだろう。

恥ずかしいが今まで恋愛経験ないんだ。だから、何をすれば良いかわからない。

過去のせいで相談出来る友達も居ないし……。母にこんなことは相談出来ない。

どうしよう……。

駄目元で

智代と彼氏彼女の関係（仮）になってから何の進展もなく一週間経過した。一緒に下校はしているけど……。まだ手すら握ったことがない。

普通なら一週間も経過したなら何かしらの進展があるだろう。

まあ、智代は俺のこと好きじゃないから仕方ないけど……。慰めの言葉なのに悲しくなるが……。

このままでは自然消滅してしまう。そんなのは嫌だ！ 折角、偽りでも智代の彼氏になれたのだから……。

勿論、現状で満足するつもりはない。親好を深めて正式な智代の彼氏になりたいと思う。

そのためには智代に好かれる男にならなければならない。でも、経験がないから何をすれば良いかわからなかった。

……とりあえず駄目元で王道のデートにでも誘ってみようかな。ギャルゲーだとそこから進展するのしな。

よし、明日デートに誘ってみよう。俺は意を決して智代をデートに誘ってみようと決めた。

翌日の放課後。俺は何時ものように校門で智代を待っている。

どうやら智代のクラスの担任は長話が好きなようだ。一週間の中で智代のクラスが俺のクラスより早く終わったことはない。単に俺の担任が手短に終わらせてる可能性もあるがな。

「お待たせ。何時も待たせてすまないな……」

智代がやって来た。少し息を切らせている。走ってきたのだろうか？

「いや、智代のせいじゃないし」

悪くないのに謝る、智代。真面目だなと思う。いや、真面目すぎる気も……。

「そうだが……でも、ぐつちを待たせてしまったことには代わりないだろう」

「智代のためなら喜んで何年でも待つよ」

Mじゃないですよ？ どちらかと言えばSですから、多分。

「ぐつちは優しいな……」

智代が小声で何か喋っている。でも、声が小さすぎて聞こえない。
「今何て？」

「へ？ な、何でもないぞ。何でも……」

何故かりんごのように頬を赤く染め慌てる、智代。そしてまた小
声で喋る。くちやくちや気になる……。

「大丈夫か？」

「何がだ？」

質問の意味がわからないといった感じの智代。

「顔赤いよ？ 熱でもあるの？」

俺は心配になり智代の額に手を当て、自分の額に手を当て比べて
みる。が、良くわからない。

俺は自分の額と智代の額をくつつける。

「……熱はないみたいだな」
良かった。

「っ……」

何故か殴られた。顔だけでなく耳まで真っ赤な、智代。……痛い
よ。

「いきなり何？」

「そ、それはこっちの台詞だ！ いきなり何をするんだ、お前は！
てつきり私は……」

凄じ剣幕で怒鳴る、智代。

「私は、何？」

「っ……」

また殴られた。今度はその衝撃で木に叩きつけられた。……人っ
て飛べる生き物だったんだね……知らなかったよ。

「……ぐっちはデリカシーに欠ける。少しは女心を理解して欲しい」
女心理解とか無理。

「秋の空って言うし……」

「暫く地上の者でなくしてやろうか？」

智代は微笑む。その笑みに何故か寒気を感じる。まるで北極に瞬間移動したみたいだ。

「ごめんなさい。努力します」

俺は土下座した。まだ死にたくないし……。

「全く……お前というヤツは……」

小さく溜め息を吐く、智代。

ヤバイ、説教モードだ。説教なんか喰らいたくない。

「そう言えば俺達付き合ってそろそろ一週間経つよな？」

だから話をそらすことにした。上手く行けばデートにも誘えるし。

「そうだな」

「だから、そろそろ恋人らしいことを……」

「一緒に下校してるじゃないか。これは恋人らしいだろう。うん、
実に恋人らしいぞ」

勝手に自己完結する、智代。

全然違う！ 恋人同士なら手を繋ぐとか、腕を組むとか、帰り際に……。

「……ぐっち？」

自分だけの世界にトリップした俺を心配そうな目で見つめる、智代。

「はっ……とにかく、そろそろデートしてくれても良いと思う」

妄想世界から帰還した俺は意を決して駄目元でデートに誘う。

「別に構わないぞ。……どこに行くんだ？」

えええ！？ まさかのOKが出たよ。……駄目元だからプラン決めてないんだけど。

落ち着け、クールになれぐっち。今俺はクールなぐっち。略してクールぐっち。

「……いや、勿論プランは立てたよ。ただ、智代が行きたい場所と違ったらアレだからさ……」

よし、完璧。流石、クールぐっち。さりげなく予定を立て忘れた事もカバーしている。

「予定が決まってるならそれで大丈夫だ。ぐっちに合わせるぞ」

……ガーン。完璧な作戦だったのに……。

「……好き嫌いとかあるでしょ？」

「ない」

即答されました。ピーマンとか食べれるの？ アレは全人類の敵だよ！？

「……ごめん。断られると思ってたから予定立ててないんだ」

大きな溜め息を吐く、智代。

「ぐっち……お前馬鹿だろう？」

真顔で断言された。事実なだけに否定出来ない。

「ああ、馬鹿だよ。で、智代は何処に行きたいの？」

「そうだな……」

ああ、俺は何て馬鹿なのだろう。こんな事になるならちゃんとプランを立てとけば良かった。智代があんな場所を選ぶなんて……。

だが、違う場所にすることは出来ない。自分の失敗で智代を頼ったのだから、それを無下にするなどというのは流石に人の道に反する。

だから俺はその痛みを受け入れなければならないのだ。智代とのデートは楽しみ、でも……に行くのは憂鬱だ。はあく。

視点変更

ぐっちと彼氏彼女の関係（仮）になってから何の進展もなく一週間経過した。一緒に下校はしているけど……。まだ手すら握ったことがない。

普通なら一週間も経過したなら何かしらの進展があるだろう。
でも、ぐつちが鈍感過ぎて……。
このままでは自然消滅してしまう。そんなのは嫌だ！　ぐつちな
ら私の全てを受け入れてくれる気がするんだ……。私の暗い過去で
さえも……。

私は鷹文の見舞いに來ていた。

「姉ちゃん、僕なんか構ってないで兄ちゃんとデートでもしてき
たら？」

突然、脈らくもなく変なことを言う鷹文。まだ付き合って一週間
も経ってないのにデートなんて早すぎる。軽い女だと思われてしま
うじゃないか……。

「う、うるさい！　鷹文には関係ないだろう。私達のことはほっと
いてくれ」

「いや、僕なんかに構ってて姉ちゃんが振られたら申し訳ないしね」
振られる……。ぐつちに限ってそんなことは……。

「大丈夫だ」

「どうして？」

「ぐつちは私にベタ惚れだからな。だから何の心配もない」

本当は少し不安だ。

「わからないよ。兄ちゃんも男だからね……。誘惑されたら簡単に
……」

……浮気してるぐつちを想像してしまう。

「……うう」

悲しくて悔しくて泣いてしまいそうだ。でも、弟の前で涙を見せ
る訳には行かない。

「わっ、ちよっ……姉ちゃん。泣かなくても……」

「だって……」

……姉失格だな。でも、悲しいんだから仕方ないじゃないか。

「冗談だって……兄ちゃんは浮気しないよ、多分」

「……本当か？」

「うん。だから……とりあえずこれで涙を拭きなよ」

鷹文がハンカチを私に渡した。

「……うん」

私はハンカチで自分の顔を拭う。弟の前で本当に泣いてしまうとは……恥ずかしい。……全部、ぐつちが悪いんだあ。どうしてアイツは私をこんなに不安にさせるんだろう。別に好きではなかった筈なのに……。

翌日の放課後。私は何時ものように校門に向かう。ぐつちと一緒に下校する約束をしてるからだ。

しかし、私の担任は長話が好きなようだ。一週間の中で私のクラスがぐつちのクラスより早く終わったことはない。単にぐつちの担任が手短に終わらせてる可能性もあるがな。

「お待たせ。何時も待たせてすまないな……」

「いや、智代のせいじゃないし」

悪くないのに謝る、智代。真面目だなと思う。いや、真面目すぎる気も……。

「そうだが……でも、ぐつちを待たせてしまったことには代わりないだろう」

「智代のためなら喜んで何年でも待つよ」

ぐつちの優しさが心地いい。だからつい甘えてしまう。

「ぐつちは優しいな……」

そんなぐつちだから私は……。

「今何て？」

つい心の声を口に出してしまっていたようだ。

「へ？ な、何でもないぞ。何でも……」

頬が熱い。

「大丈夫か？」

「何がだ？」

「顔赤いよ？ 熱でもあるの？」

ぐつちが私の額に手を当てる。そして急接近するふたりの距離。これは……キス、キスをされてしまうのか！？ まだ心の準備出来てないのに。でも、ぐつちになら私の初めてを……。

そしてふたりの……額がくっついた。どうやら私の勘違いだったようだ。……私は一気に脱力してその場に座りこんでしまう。

「……熱はないみたいだな」

触れられた額が熱い。頬も焼けるように熱い。だから私は……。

「っ……」

照れ隠しにぐつちを殴る。

「いきなり何？」

「そ、それはこっちの台詞だ！ いきなり何をするんだ、お前は！ てつきり私は……」

数分前のドキドキを返せ！

「私は、何？」

「っ……」

もう一度照れ隠しに殴る。今度は上手く力を抑えられなかった。でも、ぐつちの自業自得だ。だから私は悪くない。

「……ぐつちはデリカシーに欠ける。少しは女心を理解して欲しい」
切実に。

「秋の空って言うし……」

私の中で何かが切れた音がした。

「暫く地上の者でなくしてやろうか？」

「ごめんなさい。努力します」

ぐつちは土下座した。そこまでしなくても良いのに……。

「全く……お前というヤツは……」

「そう言えば俺達付き合ってそろそろ一週間経つよな？」
「そうだな」

「だから、そろそろ恋人らしいことを……」

「一緒に下校してるじゃないか。これは恋人らしいだろう。うん、実に恋人らしいぞ」

突然、不気味な笑みを見せるぐっち。何か悪い物でも食べたのだろうか？ ……心配だ。

「……ぐっち？」

「はっ……とにかく、そろそろデートしてくれても良いと思う」「別に構わないぞ。……どこに行くんだ？」

楽しみだ。……でも、どんな服を着てけば良いのだろうか？

「……いや、勿論プランは立てたよ。ただ、智代が行きたい場所と違ったらアレだからさ……」

「予定が決まってるならそれで大丈夫だ。ぐっちに合わせるぞ」

「……好き嫌いとかあるでしょ？」

「ない」

「……ごめん。断られると思ってたから予定立ててないんだ」

思わず大きな溜め息を吐く。……やはり病院を紹介した方が良いのだろうか？

「ぐっち……お前馬鹿だろう？」

間違いない。

「ああ、馬鹿だよ。で、智代は何処に行きたいの？」

「そつだな……」

今週の日曜日にぐっちとデートの約束をした。……には幼い時に行ったただだから楽しみだ。

まだ、家族が壊れてない時に行った。……少しだけ昔を思い出し鬱な気分になる。

大丈夫、ぐっちなら信じられる。ぐっちとなら彼等とは真逆の暖かい……。そして私は過去の呪縛に勝てるんだ。

私はそう自分に言い聞かせる……。

初デート

人間なら誰しも好き嫌いがあると思う。少なくとも俺には嫌いな物が沢山ある。

普通の人より多分多いと思う。これは良くないことだ。でも、嫌いなんだから仕方ない。好き嫌いをなくすつもりはないからな。

その内の1つに動物がある。動物は命あるから物扱いはおかしい？　だが、法律上動物は物扱いなのだ。だから苦情は法律を作った奴に言えよな。

そも人間は自分勝手過ぎる。先住民である動物を虐げ命を奪い土地すらも奪った。それは正に悪魔の所業。

道徳に年上を敬うとあるが……それは出来ているのか？　人間など動物達に比べたら赤子みたいなものだ。動物は人間と違う分類に考えているんですね、わかります。

人間は皆等しく悪魔である。だから俺も動物なんてどうでも良い。だって悪魔だもの。

俺は醜いモノを嫌う。動物は人間の醜いモノを特に具現化される気がする。

だから動物は嫌いだ。
なのに……。

今日、俺は嫌いな筈の動物園に行く予定だ。智代と動物園でデートをする約束をしたから。

待ち合わせの場所に着くと。

「おはよう、ぐっち」

智代は水色の可愛いワンピースの服を来ていた。今日のためにおめかしをしてきたのだろう。

俺なんかとのデートのために……。ちょっと嬉しい、否かなり嬉しい。

対して俺は普段着だ。失敗したかも……。……デートの経験ないのだもの仕方ないよな。

因みに俺は遅刻はしてないからな。約束の時間の10分前だ。

「おはよう」

智代は何故か不安そうな表情をする。

「……その、おかしくないだろうか？」

「何が？」

「……服のことだ。私にはこういう可愛い系の服は似合わない気がする。でも、鷹文が着て行けと言うから……」

弟GJ！ ありがとう。今度見舞いに行くときは何か良い物を渡してやろう。

「そんな事ないぜ。スゲー似合ってる。可愛いよ」

「……可愛い。そうかなら良かった。ぐつちに喜んで貰え嬉しいぞ」
智代は頬をりんごの様に赤く染める。

智代のデレは反則だと思う。だから、つい……。

「そんなにジーと見ないでくれ。恥ずかしいじゃないか……」

穴があきそうな程に智代を凝視してしまう。

「智代が可愛いから仕方ない」

俺は悪くない！ 智代の隣に居て凝視しない男など居るのだろうか？ いやない！ 反語おおお……！！

「止めてくれ……照れてしまうじゃないか」

更に頬を赤く染める智代。可愛い、可愛い過ぎる。

抱き締めたい。でも、悲しいけどそれは出来ない。何故ならば俺達は偽りの恋人同士だから……。

何時かは必ず！ 欲しがりません、勝までは……。

そうこうしてる内に動物園に到着してしまう。憂鬱な気分になる。

「ぐつち、体調悪いのか？」

心配そうな顔で智代が質問する。

「大丈夫。ちょっと寝不足なだけだから」

寝不足なのは本当だ。昨日の夕方から日が変わるまでドラクエのレベルあげしてた。ドラクエの中毒性は異常だな。

「そうか……なら良いんだ。無理はするなよ。あと睡眠は大切だぞ」……睡眠は大切だよな。そんなことはわかってる。でも、夜更かしせずには居られない。恐るべし、ドラクエ！

俺達は動物園に入る。色々な動物がいる。動物園だから当たり前か……。

「ぐっち、シマウマだぞ！」

何故かテンションが異様に高い智代。まるで子供みたいだ。

「そうだね」

やる気なく適当に相槌をする。

「テンション低すぎるぞ、ぐっち。……私と一緒に居るのが嫌なのか？」

智代は肩を力なく落とし、眉を下げ落ち込む。

しよげてる智代も可愛い。全ての智代が可愛い。抱き締めたいよ。そんな事あるはずがないだろう。俺は智代が大好きなんだから」

「本当か……？」

智代は目を細めて、俺の顔を凝視する。

顔が近すぎるよ。智代の形の良い唇が俺の視界にはつきりと映る。智代の吐息が俺の鼻をくすぐる。

俺は辛抱出来ず……智代を抱き締めしなう。頭では駄目だと理解しているけど体の暴走をとめられなかった。

何か柔らかいモノが俺の胸で潰させる。これは！？

「なっ！？」

驚いた智代は俺の下半身を蹴る。男にしかわからない激痛が全身を襲う。俺は情けなく地面にしゃがみこむ。

「いきなり何をするんだ！？　びっくりするじゃないかつ！」

智代の頬は真っ赤に染まり、耳まで赤い。

「ゴメン。その智代が可愛いすきで我慢出来なかった」

我慢とか無理。自重、何コレ美味しいの？

「……せめて事前にそう言ってくれ。じゃないと心の準備が……」
つまり事前に言えば問題ない？

「智代を抱き締めて良いかな？」

「……少しだけなら構わないぞ」

智代は小さく頷いた。

俺は智代を抱き締める。柔らかい……女の子って柔らかいんだな。産まれて初めて感じる感触に思わず涙腺が緩みすぎて油断したら感涙してしまうそうだ。

幸せです。今の俺は間違いなく世界一の幸せを体感している。何時までも抱き締めていたい。動物嫌いとかもうどうでも良い。憂鬱な気分が吹き飛んだ。

「……そろそろ止めてくれ。恥ずかしくて倒れてしまいそうだ」
ずっと抱き締めていたい！

「延長お願いします」

「駄目だ」

智代は俺の肩を押して引きはがす。所詮、女の力だから男に敵う筈が……。

「え！？」

俺は智代の力に全く逆らえず引き剥がされてしまう。アノ細腕の何処にこんな力が！？

それとも俺が単に弱いのだろうか……。普通だと思ってたのに……雑魚だったなんてシヨックだ。

そのシヨックのあまり呆然として、その場に石像のように固まってしまう。

「ほら、次行くぞ」

智代が俺の手を引っ張る。俺はその力に逆らうことが出来ずなすがまだ。

俺を殴り飛ばしたことといい、先程の馬鹿力。……もしかして智代は……。

突然、俺の手がもの凄い力で握り潰される。まるで万力で潰され

てるみたいだ。

「今ものすごく失礼な考えをしたらどう？」

智代の背後に黒いオーラが見える。怖い、怖すぎる。

「ごめんなさい」

俺は土下座した。智代は大きく溜め息を吐く。

「次はないからな！」

智代と一緒に動物を見て回る。

「おい、ぐつち。彼処にお前のそっくりの動物が居るぞ」

智代は笑いながら猿山に居る1匹の猿を指差す。

「……」

幾等、俺が不細工といえどこれは酷い。でも、確かに似てるかも。俺は悔しくて智代を無視する。

「怒ったのか？ 怒ってる顔は更に猿そっくりだな。うん、そっくりだ。寧ろ猿そのものだな」

「……」

イジメっ子？

「……でも、私はそんなお前が……」

智代は頬を赤く染めて小さく呟いた。何て言ったのだろうか？ すごく気になる。

「え、今なんて？」

「……え、聞いてたのか！？ ……べ、別になんでもないぞ！」

智代は悪戯が母親に見付かった子供のように慌てている。

「気になる」

「気にするな。それよりお腹が空かないか？ もうお昼だしご飯にしよう」

時計を見ると確かにもうお昼だ。お腹も空いているしランチにしよう。でもその前に……。

「さっき何て言ったか教えてくれよ」

「しつこいぞ！」

殴られた。ちよつと調子に乗りすぎたか……。

その後はふたりでランチを食べる。そしてふたりで動物を見て回る。

嫌いな筈の動物を見ても全く嫌な気分にならない。寧ろ……。

智代と居るとどんな些細なことですら宝石のように輝いて見える。智代と出会ったことであんなに灰色だった景色が一変した。何時までもずっとこうして居たい。

だが現実残酷で全ての時間には等しく終りがある。

日が落ち。辺りが闇に染まる。

「もう、こんな時間か……。そろそろ帰らないとだな。ぐつちと居ると楽しくてつい時間を忘れてしまう」

天が容赦なく楽しい時間の終りを告げる。

「俺もだよ。まだ一緒に居たいよ」

智代とふたりで永遠の時を生きたい。他には何も要らない。

「またデートしよう」

終りは始まりでもあるのか……。

「ああ」

俺達は動物園を出て、家路を急ぐ。

智代の家に着いた。

不意に俺の唇に何か柔らかいモノが触れた。これって、まさか……。

「……また明日」

そう言って智代は家に入っていった。

なんか唇を中心に全身が熱い。今なら何でも出来そうだな。

俺は頬をつねる。痛みを感じたから夢じゃない。

これって正式な恋人同士になれたってことだよな？ 智代は好きでもない相手にキスなんてしないだろうし……。

俺は嬉しさのあまり吠えなくなつたが我慢した。流石に夜に吠えたら近所迷惑だからな。

俺はスキップしながら家路に向かう。周囲には変人に見えたかも

知れないが気にしない。嬉しいんだから仕方ない。

この日、俺が唇を洗わなかったのは言うまでもない。

世界は美しい、人生はかくもすばらしい。未来は輝いている。智代さえ居ればそう確信していられる。

視点変更

ぐつちと日曜日に動物園に行く約束をした。いわゆるデートというヤツだ。

動物園に行くのはかなり久しぶりだ。それはまだ両親の仲が良かった遠い、遠い昔。

いや、昔の話をするのをよそう。大切なのは過ちを認め反省することだから。彼らは十分すぎるほどに反省している。だから昔の話はもうしない。

ただ、暖かい家庭を取り戻すことを願う努力するだけだ。そして同じ過ちを二度と繰り返さない。きっとぐつちとなら暖かい家庭を……。って、まだ当分先の話だな。

とにかく、ぐつちとのデートが楽しみだ。そして私の気持ちを……。…。

私は鷹文の見舞いをするため病院に行く。怪我の治りは順調で来年の春には完治するみたいだ。

「そう言えば姉ちゃん日曜のデートはどんな服を着ていくつもりなの？」

まだ、鷹文にデートのことを話していない筈なのだが……。

「どうして知ってるんだ？」

「兄ちゃんがメールで言ってきたんだよ。で、どうするの？」

正直な話、経験がないからわからなかった。

「普段着では駄目なのか？」

鷹文は大きく溜め息を吐いた。

「駄目に決まってるよ。そんなことしたら嫌われるよ」

嫌われるのは嫌だ。それだけは何としても避けなければ。

「どうすれば良いんだ？」

「前に父さんに買ってもらったワンピースを着ていきなよ」

アレは……

「可愛い感じなのは私に似合わないと思う」

残念だが。

「そんなことないって！ 姉ちゃんなら絶対似合うよ」

断言する弟。

「本当か……？」

とても信用出来ない。

「きつとワンピースを着た姉ちゃんを見たら兄ちゃん喜ぶよ」

……ぐつちが喜んでくれるなら。恥ずかしいが頑張ってみよう。

約束の時間までまだ30分もある。少し早く来すぎたか……。だが、少しでも早くぐつちに会いたいのだから仕方ない。

それに待つ時間は嫌いじゃない。……恋人を待つ少女。女の子らしいだろう？ うん、すごく女の子らしい。

走ってるぐつちが私の視界に映る。まだ約束の時間まで10分以上も余裕があるのに……。ぐつちも私と同じ気持ちなのだろうか？

「おはよう、ぐつち」

「おはよう」

ぐつちは私の服を凝視する。やっぱり変なのだろうか……。不安だ。

「……その、おかしくないだろうか？」

「何が？」

「……服のことだ。私にはこういう可愛い系の服は似合わない気がする。でも、鷹文が着て行けと言うから……」

こういう服は鷹文の彼女の河南子みたいに可愛い子じゃないと似合わないと思う。

そう言えば河南子の姿を最近見ないな。喧嘩でもしたのだろうか？
「そんな事ないぜ。スゲー似合ってる。可愛いよ」

か、可愛い？ 私なんかか！？ ワンピース着て来て良かった。
ありがとう、鷹文。

「……可愛い。そうかなら良かった。ぐつちに喜んで貰え嬉しいぞ」
ぐつちは更に私を凝視する。

「そんなにジーと見ないでくれ。恥ずかしいじゃないか……」

体が熱い。可愛いなんて久しく褒められたことないからどんな反応をすれば良いかわからない。

「智代が可愛いから仕方ない」

「止めてくれ……照れてしまうじゃないか」

ぐつちは奇声を発して、息を荒くする。こんなぐつちは初めてだ。
ちよつと怖い。

そうこうしてる内に動物園に到着する。

「ぐつち、体調悪いのか？」

青い顔をしている。足も酔っ払いのようにふらついている。

「大丈夫。ちよつと寝不足なだけだから」

私も興奮して寝れなかった。そうか……ぐつちも私と同じなんだな。嬉しい。

「そうか……なら良いんだ。無理はするなよ。あと睡眠は大切だぞ」
私達は動物園に入る。色々な動物がいる。動物園だから当たり前か……。

「ぐつち、シマウマだぞ！」

「そうだね」

やる気なく適当に相槌をする。

「テンション低すぎるぞ、ぐつち。……私と一緒に居るのが嫌なのか？」

私のこと嫌いになってしまったのだろうか？ 不安だ……。
「そんな事あるはずがないだろう。俺は智代が大好きなんだから」

「本当か……？」

突然、ぐつちが私を抱き締めた。

「なっ!？」

私はぐつちの下半身を蹴る。ぐつちは情けなく地面にしゃがみこむ。

「いきなり何をするんだ!？　びつくりするじゃないかっ!」

「ゴメン。その智代が可愛いすきで我慢出来なかった」

「……せめて事前にそう言ってくれ。じゃないと心の準備が……」
心臓がいくつあっても足りないぞ。

「智代を抱き締めて良いかな？」

……。

「……少しだけなら構わないぞ」

私は小さく頷いた。

ぐつちが私を抱き締める。

「……そろそろ止めてくれ。恥ずかしくて倒れてしまいそうだ」
顔から火が出るくらい恥ずかしい。

「延長お願いします」

「駄目だ」

私はぐつちの肩を押して引きはがす。

「え!？」

ぐつちは私の力に全く逆らえず引き剥がされてしまう。ヘタレすぎる……。

ぐつちは呆然として、その場に石像のように固まってしまう。

「ほら、次行くぞ」

私はぐつちの手を引っ張る。

ぐつちが何か変なことを考えている気がする。

「今ものすごく失礼な考えをしただろう？」

「ごめんなさい」

ぐつちは土下座した。私は大きく溜め息を吐く。

「次はないぞ」

ぐつちと一緒に動物を見て回る。

「おい、ぐつち。彼処にお前のそっくりの動物が居るぞ」

私は笑いながら猿山に居る1匹の猿を指差す。

「……」

ぐつちは不満そうに頬を膨らませる。

「怒ったのか？ 怒ってる顔は更に猿そっくりだな。うん、そっくりだ。寧ろ猿そのものだな」

「……」

ぐつちは無視する。酷い……。

「……でも、私はそんなお前が……」

「え、今なんて？」

しまった、声に出していたのか。

「……え、聞いてたのか！？ ……べ、別になんでもないぞ！」

「気になる」

しつこい。

「気にするな。それよりお腹が空かないか？ もうお昼だしご飯にしよう」

時計を見ると12時を過ぎていた。お腹も空いているしランチにしよう。

「さっき何て言ったか教えてくれよ」

「しつこいぞ！」

私はぐつちを殴る。暴力はよくないが、しつこいぐつちはもっと悪い。

その後はふたりでランチを食べる。そしてふたりで動物を見て回る。

ぐつちと居るとどんな些細なことですら宝石のように輝いて見える。

昔の私からは今の姿は想像出来ないだろう。昔の私が今の私を見

たらどう思っただろうか？

叶うならばずっと行ってに居たい。

でも現実残酷で全ての時間には等しく終りがある。

日が落ち。辺りが闇に染まる。

「もう、こんな時間か……。そろそろ帰らないとだな。ぐっちと居ると楽しくてつい時間を忘れてしまう」

天が容赦なく楽しい時間の終りを告げる。

「俺もだよ。まだ一緒に居たいよ」

私だつてまだぐっちと一緒に居たい。でも、遅くなると親に心配をかけてしまう。それは避けたかった。

「またデートしよう」

それに終りは新しい物語の始まりでもあるのだ。

「ああ」

私達は動物園を出て、家路を急ぐ。

私の家に着いた。

これで終わりだなんて寂しい。まだ私の気持ちも伝えてないしな。でも、声で伝えるのは少し恥ずかしい。だから私は……。

「……また明日」

好きの気持ちを込めてキスをした。それは一瞬の出来事。瞬きしたら見逃してしまうような短い時間。でも、私にとっては大切な思い出になるだろう。ぐっちにとっても大切な記憶になってくれたら嬉しい。

「え！？」

戸惑う、ぐっち。私は恥ずかしくて戸惑うぐっちを置いて背を向け家に帰る。

因みにファーストキスだ。ぐっちは経験あるのだろうか？……明日聞いてみよう。

だが、もし経験ありなら私はきつとそのぐっちの初めてのキスを奪った女子に嫉妬してしまう。そんな醜態は好きな人に見せたくない。……聞くのは止めておこう。今は私がぐっちの彼女なのだから。

ふたりの記念となる思い出をぐっちと一緒に沢山作りたい。そして、ずっとふたり一緒に……。

お節介な彼女とぐうたらな彼氏

……アノ智代とついに正式な恋人同士になれた。嬉しくて自然と頬が緩む。

それにしても……柔らかかったな。マシユマロみたいな感触だった。

そんな事をずっと考えていたら……朝の4時になってしまった。ゲームで常に夜更かしをしているがこんなに起きていたことはない。しかも、明日は学校だというのに……。

まだゲームやってないけど、流石に寝るか……。

俺は風呂に入って寝ることにした。

「ぐつち、朝だぞ！ 早く起きてくれ」

何故か智代の声がする。でも、それは有り得ない。何故ならば智代に俺の家を教えた記憶がないからだ。故に智代が家に居ることは残念ながら有り得ないのだ。

ああ、なんだ夢か……。折角、彼女が彼氏を起こすという夢のシチュエーションなのに。

智代はカーテンを開ける。陽射しが目に染みる。……何で夢なのに感覚があるんだ？

最近の夢は感覚まであるのか……。スゲー進歩だな。しかし、そうなると頬を摘み夢かどうか確認出来なくなってしまうじゃないか。それは困る。

「ほら良い天気だぞ。だから、早く起きるんだ」
どうせ夢なら……。

「キスしてくれたら……」
「なっ!？」

智代は頬をりんごのように赤く染め、慌てる。その仕草はマジで可愛い。その可愛いさたるやそこら辺のアイドルがゴミに見えるく

らいだ。

「……キスしたら起きるのか？」

智代は少し間を置いてから俺に質問する。

「起きるよ」

キスして貰えるなら死んでも蘇るよ。

俺の唇に柔らかいモノが触れた。……夢にしてはやけにリアルだな。

「ほら、キスしてやったんだから早く起きろ！」

智代は怒鳴る。これは恥ずかしさを隠すためだろう。デレ状態の智代の可愛さは犯罪クラスと言っても過言じゃない。

「ワンスモアプリーズ」

夢だし、調子に乗ってみることにした。

「調子に乗るな！」

智代は俺の顔を踏む。ヤバイちよつと気持ちいいかも……。はっ、何かいけない世界に行ってしまう所だった。

そして布団を奪う。

……もしかして現実？

「どうやって智代入って来たの？」

「普通に玄関からだぞ。戸締まりはちゃんとすべきだ。不用心すぎるぞ。気を付ける」

あつ、戸締まり忘れてた。まあ、泥棒に入られても盗まれる物なんてないからどうでも良いけどな。

「や、そうじゃなくて……俺は智代に家の場所教えてないじゃん」

「ぐつつちが前にハガキ持っていただろう。それを記憶していたんだ」

どんな記憶力だよ……恐ろしい子。決して智代には逆らうまい。いや、逆らえないけどな。……俺は間違いなく尻にしかれるな。

「……何しに来たんだ？」

「ぐつつちは登校時間がギリギリだろう。それは良くないことだ。だから彼女としてお前の生活を改善させることにしたんだ。……それに毎朝、彼氏を起こすというのはすごく彼女らしいだろう」

時計を見るとまだ30分も余裕がある。えーと、これが毎日続くと……。夜更かしが当たり前の状況でそれは拷問に等しいぞ。

「智代……」

俺は真剣な目で智代を見つめる。

「ん、何だ？」

「別れよう」

そんな拷問に耐える自信はない。数分の沈黙。

「……うん、わかった。だから、早く冗談だと言ってくれ。早く冗談だと言ってくれないと本当に泣いてしまいそうさ。うう……」

智代は今にも泣き出してしまいそうさ。

……マジ可愛い。俺が間違ってたよ。智代のためならどんな拷問にも耐えてみせる。

「うん、冗談」

智代は無言で俺の太股をつねる。

「いたっ」

その痛さで泣いてしまいそうさ。

智代は大きく溜め息を吐く。

「ぐっちの冗談は全然笑えない。よしてくれ……」

智代は目を細めて、俺を非難する。

「いや、智代があんまりにも可愛くてさ」

「か、可愛い……。ばかぁ」

智代は頬を赤く染め口を尖らせてそっぽを向く。

「マジで可愛い」

「止めてくれ……照れてしまうじゃないか」

やっぱり智代をからかうと面白い。や、可愛いのは本心だけど。

「テレてる智代の可愛いさは誰も勝てないな」

「うう……ばか、ばか、ぐっちのばか」

我慢の限界に達した智代は耳まで赤く染める。そして俺の胸を軽く連打する。

1時間後。

「はっ、学校……」

楽しすぎて時間を忘れていた二人。

「さぼろうぜ」

「駄目だ」

即答された。……今から行っても間に合わないのに。

「早く学校に行くぞ」

「めんどい」

智代は俺の手を強引にひっぱり学校へと連行する。俺は抵抗するが全く逆らえない。

男が女にリードされるのはカッコ悪いって思ってたけど……こういうのも良いかも知れないな。

毎朝自慢の可愛い彼女が迎えに来て、楽しく会話しながら登校する。うん、幸せな風景だ。

ただ、当分はゲーム控えないとだが……。

智代には言えないが授業中、眠たのは言うまでもないだろう。だって眠いんだから仕方ない。

視点変更

ぐつちとついに正式な恋人同士になれた。嬉しくて自然と頬が緩む。

この関係を育て何時かは……。そのために私は努力を惜しむつもりはない。

彼女は彼氏を起こしに行くものだ、こないだ見た本に書いてあった。

私はぐつちが持っていたハガキに書いてあった住所を頼りに移動する。

するとアパートに着いた。探索するとぐつちと書いてある表札が

見付かる。

何度かインターホンを鳴らすが返事がない。試しに戸を右に動かしてしてみると開いた。

戸締まりしないなんて不用心だな。泥棒が入ったらとうするんだ。彼女としてちゃんと注意しないとイケないな。

気持ち良さそうに眠るぐつちを発見した。

「ぐつち、朝だぞ！ 早く起きてくれ」

が、反応がない。私はカーテンを開ける。陽射しが部屋を照らす。これでも起きないのか……。

「ほら良い天気だぞ。だから、早く起きるんだ」
快晴だ。

「キスしてくれたら……」

……別にするのは構わないがムードとか考えて欲しい。

「なっ!？」

「……キスしたら起きるのか？」

でも、初めてではないし……恋人だから構わないか。

「起きるよ」

約束だからな。私はぐつちの唇を奪った。二回目のキス……おはようのキスというのも女の子らしくていいな。うん、すごく女の子らしい。

「ほら、キスしてやったんだから早く起きろ!」

約束を破る奴は嫌いだ。

「ワンスモアプリーズ」

なぜ、英語? しかも、発音が間違ってる。

「調子に乗るな!」

私はぐつちの顔を踏む。そして布団を奪う。

「どうやって智代入って来たの?」

「普通に玄関からだぞ。戸締まりはちゃんとするべきだ。不用心すぎるぞ。気を付けろ」

「や、そうじゃなくて……俺は智代に家の場所教えてないじゃん」

「ぐつちが前にハガキ持っていただろう。それを記憶していたんだ」
「……何しに来たんだ？」

普通に見てわかるだろう。それともまだ寝ているのか？

「ぐつちは登校時間がギリギリだろう。それは良くないことだ。だから彼女としてお前の生活を改善させることにしたんだ。……それに毎朝、彼氏を起こすというのはすごく彼女らしいだろう」

時計を見るとあと30分しか余裕がない。

「智代……」

ぐつちは真剣な目で私を見つめる。何故だろう……頬が熱い。真面目なぐつちは新鮮だな。何時も不真面目だから……。

「ん、何だ？」

「別れよう」

……。

「……うん、わかった。だから、早く冗談だと言ってくれ。早く冗談だと言ってくれないと本当に泣いてしまいそうだ。うう……」

これは冗談だ。別れるなんて有り得ない。ぐつちは私にベタ惚れだからな。……自分にいい聞かせる。

99%冗談だと思うが……1%の本気が有り得る。私は女の子らしくないからな。不安で胸が押し潰されそうだ。頼むから早く冗談だと言ってくれ。

「うん、冗談」

私は無言でぐつちの太股をつねる。

「いたっ」

ぐつちは泣く。……私をイジメるからだ！

私は大きく溜め息を吐く。

「ぐつちの冗談は全然笑えない。よしてくれ……」

本当に笑えないんだ。恋人をイジメて楽しいのか！？

「いや、智代があんまりにも可愛くてさ」

お、お世辞なんか騙されないからな。でも、嬉しい。

「か、可愛い……。ばかぁ」

私は頬を赤く染め口を尖らせてそっぽを向く。

「マジで可愛い」

「止めてくれ……照れてしまっじゃないか」

そんなに誉めないでくれ。なれてないからどうして良いかわからないだ。

「テレてる智代の可愛いさは誰も勝てないな」

「うう……ばか、ばか、ぐっちのばか」

もう、無理だ。我慢出来ない。私はぐっちの胸を軽く連打する。

1時間後。

「はっ、学校……」

楽しすぎて時間を忘れていた二人。

「さぼるうぜ」

ぐっちはふざけた発言をする。ズル休みなんて私の目が黒いウチは見逃さないからな。

「駄目だ」

……確かに今から行っても間に合わないがズル休みよりは遙かにマシだ。

「早く学校に行くぞ」

「めんどい」

私は俺ぐっち手を強引にひっぱり学校へと連行する。ぐっちは抵抗するが全く意味がない。……弱すぎる。

毎朝大好きな彼氏を迎えに行き、楽しく会話しながら登校する。

うん、幸せな恋人達の風景だ。

だが思ってたよりもぐっちを起こすのは大変だな。何時もよりかなり朝早く起きないと駄目だし、それなりに疲れる。

今日は授業中に眠らないよう気を付けないといけないな。

大変だが仲を発展させるのに必要なことだから妥協は許したくない。私の夢の実現のためにも頑張るぞ！

ピーマンは全人類の敵！

人間なら嫌いな食べ物ひとつやふたつあるだろう？

俺が最も嫌いな食べ物、それは……。

ピーマン……口に入れた瞬間に苦味が広がり、食感もぐにやぐにやして食べ辛い。それに色が変わだと思う。あと、名前も嫌い。

故にピーマンは全人類の敵である。誰だよ、ピーマンなんか開発したのは……。

だから、俺は外食する時はピーマン入っていないか必ず聞いている。それなのに……。

俺は智代とファミレス来ていた。俺達が制服なのは学校帰りだからだ。

因みにファミレスというのはファミリールレストランの略称であり、ファミリールスラーと云う意味ではないから誤解しないでくれ。

俺は店側のミスを不快に思い、怒りに身を任せて呼び出しボタンを連打する。これは絶対に許されない行為である。生涯の許せないランキングトップ30には入る、多分。

「そんなに連続で押すな。壊れたらどうするんだ？」

智代は俺を諭す。この程度で壊れる訳がない、多分。

イケメンな店員がやってきた。それが余計に俺を苛立たせる。イケメンとか……爆発すれば良いのに！

「どうされましたか、お客様？」

「どうもこうもねえーよ！俺はピーマン入っていないからこの料理を注文したんだ！なのに……」

俺は怒鳴る。三流店への迷惑、何ソレ美味しいの？ レストランはサービス業なのに……客を不快にさせるとか何なの？

「それは大変失礼を致しました。急ぎ作り直して参ります」

彼は深々と頭を下げ謝罪する。そして問題の料理を下げ、踵を

返して厨房に向おうとする。

こちらの希望通りピーマン抜いた料理を持ってきて、この件は解決。イケメンはムカつくが。

それなのに……。

「待ってくれ……それには及ばない」

智代が彼を呼び止める。彼は振り向く。

「……よろしいのですか？」

「ああ、構わない」

「かしこまりました」

彼は料理をテーブルに置き直す。

「いや、全然良くないから！」

俺は再度怒鳴る。

「お客様……店内ではお静かにお願いします。他のお客様のご迷惑になりますので」

そう言って彼は去る。

ハア？ ミスしたのはテメエだろうが！ 人が下手に出てやらあ、調子に乗りやがって！

俺は全力で怒鳴ろうと息を吸い込む。

「……」

智代が「黙れ」と殺気を込めた目で、無言で俺を睨む。

ヘタレな俺は恐怖で身がすくみ、声を出せなくなる。

「私の連れが迷惑をかけてすまなかった」

智代は頭を下げ謝罪した。

智代が俺の方を向く。

「次、また私に恥をかかせたら帰るからな」

智代が帰る……つまり、それはデートの終了を意味する。それは嫌だ。折角のデートなんだから楽しみたい。

俺は悪くないけど、仕方ないか……。

「ゴメン。気を付けるよ。雰囲気壊してすみません」

智代に頭を下げ謝罪する。

「わかってくれればそれで良い。……折角のデートなんだから私だって楽しみたいからな」

数分後。相変わらずピーマンが残ったままだ。ピーマンを食べようと何度か挑んだが尽く失敗した。

体でなく魂が俺の体内にピーマンを摂取することを拒んでいる感じだ。だいたい、ピーマンは先にも言ったが全人類の敵である。

故に食べれないし、食べる意味がわからない。敵を食べるメリットは何？ スピリット・オブ・ファイアみたいに食べたら力が上がるならまだわかるが……。

「早く食べる。料理が冷めてしまうぞ」

智代が催促する。

「無理」

「どうしてなんだ？」

「ピーマンは全人類の敵！」

智代は肩を力なく落とし、眉を下げる。そして大きな溜め息を吐いた。

「……意味がわからない」

意味がわからないことが、俺には理解出来ない。

「智代だって嫌いな食べ物あるだろう？」

「ない」

智代は一瞬間すら置くけとなく即答で断言した。

「……マジ？」

嫌いな食べ物がないとか信じられない。

「私は嘘が嫌いだ」

……確かに智代は嘘が嫌いだ。だから、他人に対して嘘を吐くことはないだろう。つまり、食べるしかないのか……。

が、何度挑んでもピーマンを食べることは出来ない。

智代は侮蔑した目で俺を見る。

「……さっきからお前は何をやってるんだ？」

「見ればわかるだろう」

智代は小さく溜め息を吐いた。しかし、行動とは裏腹に智代の表情は暗くない。寧ろ、明るくみえる。

「ほら、私が食べさせてやるから口を開ける」

智代がピーマンをフォークで刺し、俺の口元に持ってくる。

これは！？ 恋人にして貰いたいランキングトップ10に入る、恋人に食べさせて貰うという行為じゃないか！ ならばピーマンごときに屈する理由などない。俺の口よ、開けっ！

が、思いと裏腹に口は開けなかった。

「……私のこと嫌いなのか？」

智代はとても悲しそうな表情をする。

「や、好きだよ」

「なら、口を開ける」

「開けたいんだけど……開けられないんだ。どうやら俺のピーマン嫌いは魂に刻み込まれているみたいだな。だから、諦めて帰ろう」

智代は強引にピーマンを俺の口に入れようと隙間にねじ込む。しかし、ピーマンを拒む歯は堅く閉ざし開かない。

その堅さはまるで要塞のようだ。

「なら……その歯をへし折って食べさせてやる」

「え、それは……」

智代は更に力を込める。歯茎がキシキシと音を立てている。マジで歯が折れてしまいそうだ。

「ちょ、待て待てマジで折れる。誰か助けて！」

俺は叫ぶ。

「問答無用だっ！」

あと少しで歯が折れるであろう、その刹那。

「お客様……お静かにお願ひしますって私言いましたよね？ 他のお客様のご迷惑になるのでおかえりください」

俺達は強制的に追い出された。

もの凄く気まずい雰囲気。折角のデートなのに……ヘボ店員のせいで最悪なデートになってしまった。今度あったら覚えてるよ……。

しかし、それより今はこの雰囲気をなんとかしなくては！

「いやはや……俺のピーマン嫌いは本当にどうしようもないね」

「……」

智代は非難の目で、俺を無言で見つめる。

「いや、治そうとは思ってるんだよ」

無論、嘘である。ピーマンを克服するつもりなど全くない。

「本当かあ……？」

智代は疑惑の目で俺を見つめる。

「……そうだ、智代が作ってくれた料理なら食べれるかも」

智代は完璧すぎると思う。人間なら誰でも1つは苦手なものがある筈だ。俺の推測では料理だと思う。

「う、それは……」

案の定、智代はうろたえる。やはり、智代は料理が苦手なんだな。手料理食べられないのは残念だが……これでピーマンを食べる必要はなくなったから吉としよう。

「わかった。明日作ってくる」

「そうそう、やっぱり料理は無理だよな。まあ、料理が出来なくても智代は可愛いから問題ないよ。だから、そう気を落とさず……つて、ええ！？……料理出来るの？」

俺の推測が外れるなんて……。

「ああ、女の子だからな。料理くらい出来るぞ。明日は期待している」

や、俺の推測は間違いない……理由はわからないけどそんな気がする。

「……無理しなくて良いから」

「無理なんかしてないぞ」

死亡フラグ確定？ でも、智代の手料理が食べれるなら死んでも本望かも……。

視点変更

ぐつちと正式な恋人になってから一週間が過ぎた。

しかし、私達は何の進展もないままただ無為に時間を浪費している。精々、子供みたいなキスをするくらいだ。

動物園でデートした時みたいに私を強く抱き締めて欲しい。キスも触れるだけでなく、もっと……。

言葉にすれば簡単だが、そんな恥ずかしいことは言えない。それに拒まれてしまったら私はまた壊れてしまうかも知れない。

だから、私は精一杯の気持ちを込めてアピールする。

なのに……ぐつちは全く気付いてくれない。……鈍感にもほどがあるぞ。

私はもつとぐつちと仲良くなりたいのに……どうすればこの想いをお前に伝えることが出来るのだろうか？

私達はファミレス来ていた。俺達が制服なのは学校帰りだからだ。ぐつちは馬鹿みたいにボタンを連打する。恥ずかしいからそんな子供みたいなことをしないで欲しい。

「そんなに連続で押すな。壊れたらどうするんだ？」

しかし、ぐつちは怒りで私の言葉が耳に入らないのかボタンを押すのを止めない。

仕方なく力ずくで止めさせようと思ってたら、店員がやってきた。

「どうされましたか、お客様？」

「どうもこうもねえーよ！俺はピーマン入ってないからこの料理を注文したんだ！なのに……」

ぐつちは怒鳴る。店の迷惑になるから止めて欲しい。

「それは大変失礼を致しました。急ぎ作り直して参ります」

彼は深々と頭を下げ謝罪する。そして問題の料理を下げ、踵を

返して厨房に向おうとする。

こちらの希望通りピーマン抜いた料理を持ってきて、この件は解決。

だが、それは果たして本当にぐつちのためなのか？ 好き嫌いは良くない。

「待ってくれ……それには及ばない」

私は彼を呼び止める。彼は振り向く。

「……よろしいのですか？」

「ああ、構わない」

「かしこまりました」

彼は料理をテーブルに置き直す。

「いや、全然良くないから！」

ぐつちは再度怒鳴る。

「お客様……店内ではお静かにお願いします。他のお客様のご迷惑になりますので」

そう言って彼は去る。

「……」

ぐつちがまた怒鳴ろうとしている。今度、騒いだら絶対に追い出されてしまう。折角のデートがこんな事で終わってしまうなんて嫌だ。

私は殺気を込めた目で、無言でぐつちを睨む。

ぐつちは恐怖で身がすくみ、声を出せなくなる。

「私の連れが迷惑をかけてすまなかった」

私は彼に頭を下げ謝罪した。

私はぐつちの方を向く。

「次、また私に恥をかかせたら帰るからな」

「ゴメン。気を付けるよ。雰囲気壊してすみません」

ぐつちが私に頭を下げ謝罪する。

「わかってくれればそれで良い。……折角のデートなんだから私だって楽しみたいからな」

数分後。相変わらずピーマンが皿の上に残ったままだ。ピーマンを食べようと何度か挑んだようだが全て失敗した。

「早く食べる。料理が冷めてしまうぞ」

私はぐつちに催促する。

「無理」

「どうしてなんだ？」

「ピーマンは全人類の敵！」

私は肩を力なく落とし、眉を下げる。そして大きな溜め息を吐いた。

「……意味がわからない」

ピーマンは栄養価も高く、美味しいじゃないか。

「智代だって嫌いな食べ物あるだろう？」

「ない」

好き嫌いは良くない。アレルギーなら仕方ないが……。

「……マジ？」

ぐつちは目を大きく開き驚いている。

「私は嘘が嫌いだ」

嘘は人を不幸にする。そして私のトラウマを思い出させる。

「……さっきからお前は何をやってるんだ？」

「見ればわかるだろう」

私は小さく溜め息を吐いた。どんだけピーマンが嫌いなをだ。：

しかし、これはチャンスなんじゃないか？

ここでピーマンを私が食べさせてやれば好き嫌いもなくなり、私との仲も一歩前進する気がする。

うん、これはチャンスだ。少し恥ずかしいが、ぐつちとの仲を進展させるために頑張るぞ！

「ほら、私が食べさせてやるから口を開ける」

私はピーマンをフォークで刺し、ぐつちの口元に持っていく。つが、ぐつちの口は堅く閉ざされている。私の好意が拒まれた。つ

まり……。

「……私のこと嫌いなのか？」

早く否定してくれ。じゃないとこの場で泣き崩れてしまう。

「や、好きだよ」

……良かった。しかし、それならなぜ私の好意を拒むんだ？

「なら、口を開ける」

「開けたいんだけど……開けられないんだ。どうやら俺のピーマン嫌いは魂に刻み込まれているみたいだな。だから、諦めて帰ろう」

私は強引にピーマンをぐつちの口に入れようと隙間にねじ込む。しかし、ピーマンを拒む歯は固く閉ざし開かない。

その堅さはまるで要塞のようだ。

「なら……その歯をへし折って食べさせてやる」

こうなったら意地だ！ そのためなら手段は選ばない。

「え、それは……」

私は更に力を込める。歯茎がキシキシと音を立てている。よし、後少して歯が折れそうだ。

「ちょ、待て待てマジで折れる。誰か助けて！」

俺は叫ぶ。

「問答無用だっ！」

あと少して歯が折れるであろう、その刹那。

「お客様……お静かにお願いしますって私言いましたよね？ 他のお客様のご迷惑になるのでおかえりください」

私達は強制的に追い出されてしまう。

もの凄く気まずい雰囲気。折角のデートなのに……私が暴走したせいで最悪なデートになってしまった。それに店にも迷惑をかけてしまった……。後で謝罪に行こう。

しかし、それより今はこの雰囲気をなんとかしなては！

「いやはや……俺のピーマン嫌いは本当にどうしようもないね」
全くだ、好き嫌いはいよくない。

「……………」

「いや、治そうとは思ってるんだよ」

そんな雰囲気は全く見れないのだが……。

「本当かぁ……………」

「……そうだ、智代が作ってくれた料理なら食べれるかも」

料理……今まで作ったことがない。家庭科の実習も昔の私は協調性がないため避けていた。だから、全く経験がない。

「う、それは……………」

しかし、ぐつちが望むなら叶えてあげたい。そして喜ぶ顔が見たいんだ。

「わかった。明日作ってくる」

「そうそう、やっぱり料理は無理だね。まあ、料理が出来なくても智代は可愛いから問題ないよ。だから、そう気を落とさず……つて、ええ！？……料理出来るの？」

ぐつちは酷く驚いた。……やはり、女の子らしくない私が料理をしたらかわいいのだろうか。いや、ぐつちは私のことを可愛い女の子って言ってくれた。

「ああ、女の子だからな。料理くらい出来るぞ。明日は期待している」

「……無理しなくて良いから」

「無理なんかしてないぞ」

愛する彼氏のために料理を作る。これはすごく彼女らしいんじゃないか。うん、彼女らしい。

上手く行けば一歩前進するかも知れない。だから、精一杯頑張るぞ！

ふたりの未来の為に……。

初めての

家に着くと私は早速明日の弁当の準備にとりかかる。しかし、何からやれば良いのか全くわからない。

ピーマンを使った料理……。ピーマンの肉詰め、ナポリタン、餡かけ焼飯など色々ある。

でも、作り方がわからない。

仕方ない適当に作るか……。母が作った料理を真似すれば何とかなるだろう、多分。

数分後。

「何故だああああ!!!!」

私の絶叫が誰も居ない室内に木霊する。

私の試みは何故か全て失敗した。出来たのは良くわからない何か。料理というのは勿論、物体であるかも定かではない。しかも、危険な異臭を放っている。

「ただいま」

母が仕事から帰ってきたようだ。

私は玄関に行く。

「おかえり」

母は怪訝な顔をして、部屋の臭いを鼻を鳴らしかく。

「何か……。変な臭いがするんだけど」

「ああ、ちよつと料理を作ろうと思って……。でも失敗したんだ。それで……。ちゃんと後で片付けるから心配は要らない」

すると、母は何故かいやらしい笑みを浮かべる。

「例の彼氏に手料理を作ってあげるのね？ やっぱ、智代も女の子ね。安心したわ、その子の影響かしら？」

どうせ、私は女の子らしくない！ しかも、母みたいな美人から見れば尚更だろう。娘の鼻屑目無しで母は美人だと思う。綺麗に整った顔と均整の取れた体。全身から溢れる上品なオーラ。全て敵わ

ない。

ぐつちと母親を会わせるのは何としても避けなくては……比べられたら嫌だからな。

そうだ！ 母に料理を教わろう。

「うん。でも、料理をした事ないからやり方がわからくて……。だから私に料理を教えて欲しい」

母は真剣な表情をする。

「私はスパルタよ。智代について来れるかしら？」

一日で料理を覚えるのだから大変なのは元より覚悟している。

「ああ、望むところだ！」

「……わかったわ。でも、もう夕飯の時間だから特訓はその後にしましょう」

「わかった」

私達は帰ってきた父と一緒に母の作った夕飯を食べる。

それはとても美味しくて……私の作ったそれとは次元が違っていた。私にこれをマスターすることは可能なのだろうか？

想像以上の壁を体感して弱気になる。でも、ぐつちを喜ばせるために頑張るぞ！ 弱気になる自分に活を入れる。

夕飯を食べ終え、特訓がスタートした。

「智代は何を作りたいの？」

「ピーマンを使った料理を明日の弁当に入れたいんだ」

「どうしてピーマンなの？」

「……私の友人にピーマン嫌いな人が居るんだ」

流石に面と向かって彼氏の話をするのは恥ずかしい。

「例の彼氏ね」

バレバレだった。どうしてバレバたんであああ……！ 私焦

りで高鳴る心臓を静めて、平常心を保つよう頑張る。

「……好き嫌いは良くないと思うんだ。その話をしたら『智代の手料理なら食べれる』と言ったからだ」

「もう、名前で呼び合う関係なのね。で、何処まで言ったの？」

……。

「……」

私は無視する。

母は軽く溜め息を吐いた。

「仕方ないわね。この話はまた今度にしましょう。献立はピーマンを使ったサラダにするわ」

サラダ……野菜を切って盛り付けるだけ。果たしてこれは料理なのだろうか？　しかし、私には母しか頼る存在がない。故に従う以外の選択は用意されてないのだ。

「わかった」

「まずは野菜を洗うところからよ」

私は洗剤をスポンジに付け、スポンジで野菜を擦る。洗剤を洗い流す。

「出来たぞ」

「……」

が、反応がない。母は呆然とする。

「野菜を洗剤で洗う奴があるかあああ！！！」

何故かスリッパで頭を叩かれた。私はただ言われた通りにやっただけなのに……。

「もしかして、洗剤でなく漂白剤を使うのが正解なのか？」

……数分の沈黙。まるで時間が凍りついたようだ。

「……私が代わりに作るうか？」

「駄目だ」

その方が楽だと思う。でも、それはしたくない。ぐっちは私の手料理を楽しみにしてるのだから。

「なら、真面目にやりなさい」

「私は真剣だぞ！」

母は額に手を当て、倒れそうになる。私は母を掴み倒れるのを防いだ。

「大丈夫か？ 何か嫌なことでもあったのか？」

「……何でもないわ。野菜は水洗いで大丈夫だからね」

なら最初からそう言えば良いのに……無論、口には出さない。

「わかった」

私は言われた通り野菜を水で洗う。

「次は包丁の使い方についてよ」

ムツ、私はもう高校生だぞ。それぐらいわかる。

「それはわかるから大丈夫だ、必要ない。早く次のステップに行つてくれ」

「……なら、試しにキュウリを切ってみなさい」

私はキュウリを切ろうと包丁を握る。

「ストップ！ やっぱり、出来てないじゃない。そんな握りしてたら切れる物も切れないわ。それに左手を猫の手にして支えるのも忘れてるし……」

私は母の言葉を無視してキュウリを切る。すると綺麗に切れた。

私の力と速さがあれば支えなど必要ないのだ。

「どうだ」

私は誇らしげに胸を張る。

「……」

母は私の頭を無言でオタマで叩いた。

「ちゃんと基本を覚えなさい。基本をおろそかにする人間は最低よ」

母は私に一時間くらい説教をする。貴重な時間が浪費されていく。

……師事する相手を間違えたかも知れない。

そして基本を徹底的に叩きこまれた。

「次は盛り付けよ」

そんなの誰でも出来るし飛ばして欲しい。が、無論口には出さない。これ以上の時間の浪費は避けたいからな。

「食べさせたい相手を思っで見栄え良く綺麗に盛り付けることが大切よ」

よし、ぐつちへの想いを込めて盛り付けるぞ。

「出来たぞ」

自分で言うのもなんだが中々の出来だと思う。

「うーん……30点って所かしら」

辛口すぎないか？

「今日はもう遅いし……これで終りにしましょ」

確かに時計を見ると時計の短針が12を指していた。

「だが、まだ料理が……。流石にサラダだけなんて寂しすぎるぞ」
「智代のと一緒に作ってあげるわよ。私に任しときなさい」

他者に任せるのはあまり好きじゃない。それに約束を破るだなんて出来ないし、したくない。

「……それは出来ない」

「どうして？」

「約束したから」

「実際にサラダを作ったじゃない」

確かにそうだ。でも……。

「ぐつちには私以外の女性の手料理を食べて欲しくないんだ……！
私の力だけでぐつちを喜ばせたい」

結局は何だかんだと言いながらもその一言に尽きる。

突然、母はとても下品な笑みを見せる。

「ふーん、ぐつち君って言うんだ。今後、家に連れてきなさい。
会ってみたいから」

はっ！？ しまった、つい……。

「それは……」

母は大きな溜め息を吐いた。

「明日も仕事なんだけど……娘の頼みだから仕方ないか。徹夜で作るわよ」

……。

「すまない」

私の我が儘に巻き込んで申し訳ないと思う。でも……。
母は優しく笑う。まるで天使のようだ。

「違うわよ。こういう時はありがとうよ」

「うん、ありがとう！」

何故だろう？ 悲しくないのに涙が……。

朝日が目にしみる。結局一度も成功出来なかった。

でも、何とか食べれるレベルまでのモノは出来た、味は保証出来ないが。最初の頃に比べたら格段の進歩だろう。

「どうするの？ それ持つていくの？ それとも私が作る？」

母がもの凄く眠そうな目で私に質問する。

その答えは最初から決まっている。

「……正直に話す」

正直、落胆させてしまうのは心苦しい。全て嘘を吐いた私が悪いのだから……。

「そう、じゃあ私は寝るわね。おやすみなさい」

母は寝室に向かう。

「ああ、ありがとう。おやすみ」

私は努力した成果を弁当に詰めて学校に向かう準備をする。今の母に弁当を頼むのは無理だ。父にはトーストを食べて貰おう。

ぐっちは今日昼飯抜きになるかもしれない。貰える筈の弁当がなくなるのだから。すまない……嫉妬深い彼女を持ったのが運の尽きと諦めてくれ。何時か必ず私が、だから……。

視点変更

仕事を終えた私は帰宅する。

「ただいま」

娘の智代が笑顔で出迎えてくれる。

「おかえり」

キッチンの方から変な臭いがするわ。何かしら？

「何か……変な臭いがするんだけど」

「ああ、ちよつと料理を作ろうと思って。……でも失敗したんだ。それで……。ちゃんと後で片付けるから心配は要らない」

智代が料理！？ 最近智代がどんどん女の子らしくなってる。例の彼氏の影響かしら？ 初めは反対だったけど……これなら清い関係なら認めても良いかも知れないわね。

「例の彼氏に手料理を作ってあげるのね？ やっぱ、智代も女の子ね。安心したわ、その子の影響かしら？」

智代は可愛いに勿体ないとずっと思っていた。母親の鼻根目無しで智代は可愛い思う。そこら辺のアイドルなんかより絶対に可愛いわ！

「うん。でも、料理をしたこないからやり方がわからなくて……。だから私に料理を教えて欲しい」

私は夢でも見てるのかしら？ まさか智代と親子の会話が出るなんて……もしかして、この智代は偽者なの？ 私は目を細め本人かどうか確認する。

「私はスパルタよ。智代について来れるかしら？」

「ああ、望むところだ！」

「……わかったわ。でも、もう夕飯の時間だから特訓はその後にしましょう」

「わかった」

私達は帰ってきた夫と一緒に私の作った夕飯を食べる。

夕飯を食べ終え、特訓がスタートした。

「智代は何を作りたいの？」

「ピーマンを使った料理を明日の弁当に入れたいんだ」

「どうしてピーマンなの？」

「……私の友人にピーマン嫌いな人が居るんだ」

流石に面と向かって彼氏の話するのは恥ずかしい。

「例の彼氏ね」

智代にこんな風に想われるなんて……。もし、娘を泣かしたら産まれてきたことを後悔させてあげる。

「……好き嫌いは良くないと思うんだ。その話をしたら『智代の手料理なら食べれる』と言ったからだ」

「もう、名前で呼び合う関係なのね。で、何処まで言ったの？」

キス以上の関係は許しませんよ！

「……」

智代は無視する。

私は軽く溜め息を吐いた。

「仕方ないわね。この話はまた今度にしましょう。献立はピーマンを使ったサラダにするわ」

「わかった」

「まずは野菜を洗うところからよ」

智代は洗剤をスポンジに付け、スポンジで野菜を擦る。洗剤を洗い流す。

……意味がわからない。

「出来たぞ」

「……」

「野菜を洗剤で洗う奴があるかああああ！！！」

私はスリッパで智代の頭を叩いた。

「もしかして、洗剤でなく漂白剤を使うのが正解なのか？」

……ひ、漂白剤って……。ふざけてるの？

「……私が代わりに作ろうか？」

漂白剤で野菜を洗う子に、料理を教える自信なんて私にはない。

「駄目だ」

「なら、真面目にやりなさい」

「私は真剣だぞ！」

私は額に手を当て、倒れそうになる。智代は私を掴み倒れるのを防いでくれた。

「大丈夫か？ 何か嫌なことでもあったのか？」

今ここであつたのよ！？ 漂白剤って……馬鹿なの？ やる気あんの？ と、叱りたかったがグツと堪えた。

「……何でもないわ。野菜は水洗いで大丈夫だからね」

智代が「なら、最初から言え」と非難したそんな顔で私を見る。

……殴って良いかしら？

「わかった」

智代は言われた通り野菜を水で洗う。

「次は包丁の使い方についてよ」

智代は馬鹿にするなど頬を膨らませる。

「それはわかるから大丈夫だ、必要ない。早く次のステップに行ってくれ」

「……なら、試しにキュウリを切ってみなさい」

私はキュウリを智代に渡した。智代はキュウリを切ろうと、包丁を握る。

握り方が全然違う……。それ日本刀の握りよね？

「ストップ！ やっぱり、出来てないじゃない。そんな握りしてたら切れる物も切れないわ。それに左手を猫の手にして支えるのも忘れてるし……」

智代は私の言葉を無視してキュウリを切る。すると綺麗に切れた。智代の力と速さがあれば支えなど必要ないのかも知れない。だが私は母親なのだ。娘の間違いを正す義務がある。

「どうだ」

智代は誇らしげに胸を張る。

「……」

私は智代の頭を無言でオタマで叩いた。

「ちゃんと基本を覚えなさい。基本をおろそかにする人間は最低よ」
私は智代に一時間くらい説教をする。

そして基本を徹底的に叩きこんだ。

「次は盛り付けよ」

また不満そうな顔をする、智代。確か押し入れに鞭があつたよう

な……。

「食べさせたい相手を思っで見栄え良く綺麗に盛り付けることが大切よ」

智代は盛り付けを初める。

「出来たぞ」

斬新的ね。それ以外に評価しようがないわ。

「うーん……30点って所かしら」

私もまだまだ甘いわね。本当ならマイナス30点なのに。

時計を見ると短針が12を指していた。……明日も仕事なのに。

「今日はもう遅いし……これで終りにしましょ」

正直、眠い。

「だが、まだ料理が……。流石にサラダだけなんて寂すぎるぞ」

「智代のと一緒に作ってあげるわよ。私に任しときなさい」

お願いだから私を眠らせて！

「……それは出来ない」

「どうして？」

「約束したから」

「実際にサラダを作ったじゃない」

「ぐつちには私以外の女性の手料理を食べて欲しくないんだ……！」

私の力だけでぐつちを喜ばせたい」

結局は何だかんだと言いながらもその一言に尽きるみたいだ。

私にもそういう時代があったわ……。好きな人のために頑張る、懐かしい。

「ふーん、ぐつち君って言うんだ。今後、家に連れてきなさい。

会ってみたいから」

智代をこれほど夢中にさせる相手が気になるわ。

「それは……」

私は大きな溜め息を吐いた。

「明日も仕事なんだけど……娘の頼みだから仕方ないか。徹夜で作るわよ」

「すまない」

智代は今にも泣き出してしまいそうな顔をする。

「違うわよ。こういう時はありがとうよ」

「うん、ありがとう！」

朝日が目にしみる。結局、徹夜になった。しかも、その甲斐もなく未だに成功はない。そして兎に角眠い。

でも、何とか食べれるレベルまでのモノは出来た、味は……娘のプライドのためにもノーコメントでお願い。最初の頃に比べたら格段の進歩だろう。

「どうするの？ それ持っていくの？ それとも私が作る？」

「……正直に話す」

嘘をばらすのはとても勇気が居る。とても勇気ある決断だと思うわ。兎に角、私は眠い。

「そう、じゃあ私は寝るわね。おやすみなさい」

私は寝室に向かう。本当は朝食とお弁当作らないと駄目だけど……

……そんな気力はないわ。

兎にも角にも眠いのよ！ お願いだから仕事に行く時間まで寝かせてください。それだけが私の願いです。

初めての
(後書き)

スランプなので暫く休止します。

弁当？

昼休み。

俺は今まさに人生の分かれ道に居る、こついの何て言うんだっけ……ライフカード？

眼前には智代が作ったという料理（？）が見える。

疑問系なのはそれが俺の知る料理の定義に全く一致していないからなのだが……。

恐らくなのが焼きすぎで墨に変化した卵焼きとウィンナー、異臭がする未知の色をした液体などなど。

唯一まともなのはサラダだけという……。

この説明を聞けば疑問系の理由をして頂けると思う。

無論、弁当は用意していない。

失敗する可能性を考慮しないのか？

常識的に考えて智代が失敗する訳がないだろう。

世界一の美貌と世界一の優しさで世界一の頭脳と世界一のプロポーションを持つ智代が失敗するなんて……果たしてあるだろうか？

ある訳がない！ 反語おおお……！！

だから、俺が失敗の可能性を考慮するなんて有り得ないのだ。

いや、そんなことはどうでも良いのだ。

別に昼飯食わなくても死ぬ訳じゃないからな。

が、これを食べないという選択肢を選べば智代を悲しませてしま
うかも知れない……それだけは絶対に避けたい。

……。

元より選択肢なんて一つしかないのだ。

俺は覚悟を決めて……。

誰かが俺の腕を揺さぶる。

「おい、大丈夫か？ しっかりしろ」

世界一愛しくて大切な人の顔が俺の視界に映る。
ん、今までののは夢だったのかな？

そりゃそうだよな！ 智代が失敗する訳がない。
が、現実は何処までも残酷だった。

「やっぱり、夢じゃないのか……」

智代が目細めて、俺を避難する目で睨む。

「……うう、酷いぞ。た、確かに失敗作だが……そんな嫌そうな顔
しなくても良いじゃないか」

や、普通の反応じゃねえ？

「だって……」

「ふん、そんなに嫌なら食べるな！」

智代が怒鳴る。そして眉を下げて、力なく肩を落としてしまう。

このままじゃ駄目だ！

「誰も食べないなんて言っていないだろう！」

「……無理するな。これは私が食べる。失敗したのは私の責任だからな」

「や、腹壊すから止めれ」

「……あ、俺ナ二言ってるの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？ バッドE
D直行なの？」

「……そ、そこまで言うか。いくら何でも酷すぎるぞ」
諦めちゃ駄目だ、諦めちゃ駄目だ。まだ希望はあるさ！

「や、智代は美人だから胃が繊細だろ？ だから……」

「……」

智代はほんのりと頬を赤く染める。

「それにコレは俺のモノだっ！」

「ごめん、コレを料理と呼ぶのはどう考えても無理です。

「……嫌なんだろう？」

「うん、どう考えても危険だしね」

正直、食べたくないです。人間だもの仕方ないよね。

「ッ………だったら！」

智代は弁当箱を床に叩きつけようとする。目がうつすらと潤んでいる。

「ま、待て！ 人の話は最後まで聞けとならわなかったのか！？」
「うるさい！」

智代は今にも泣き出してしまいそうな顔をしている。

「それでも、俺はソレを食べたい」

愛する人には笑っていて欲しいのだよ。そのためならば命すら余裕で賭けるさ。

「え？」

「だって、ソレは智代が俺のタメに作ってくれたものだろう？」

「……うん。ぐっちへの愛を込めて作った」

愛か、ならば俺は何があろうとソレを食べなければならぬ。我が愛は何人たりとも邪魔出来ないのだから！

俺は智代から弁当を奪い返す。そして、墨を口に運ぶ。

「……」

くちやくちや固い、歯が折れるかも知れない。なあ、智代お前は
どんだけ焦がしたんだ？

「どうだろうか？」

智代が期待と不安が混じる目で俺を見つめる。

味？ そんなの聞くまでもないからな。苦味しかねえーよ！
無論、そんなことを言える訳がない。

死にたくないから？

え、馬鹿なの？ あんなに可愛い智代が暴力なんかする訳ないだ
ろ、常識的に考えて！

理由は愛する人の悲しむ顔をみたくないからに決まってるからな。
「…… 個性的な味だな」

ちよつと酷い言い方かも知れないな。美味しいと嘘をついてやる
のが優しさなのかも知れないな。

でも、それは残念ながら出来ない。

嘘を吐くと智代に怒られるからな……。

え、お前は嫁さんの尻に敷かれるタイプ？

いえ、亭主閑白です。……でも、智代の尻になら敷かれたいかも。変態じゃありません。仮に変態だとしても、紳士な変態さ。

「……そうか……不味いなら無理して食べなくて良いぞ」

智代はこの世の終わりみたいな感じで落ち込む。

「でも、胸に何か暖かいモノを感じるよ。智代が俺のために頑張ってくれたのが何よりも嬉しい」

俺は何とか墨を食べおえた。癌になったらどうしよう……。

とりあえず喉が渴いたな。

「何か飲み物ないか？」

「暖かい日本茶ならあるぞ」

智代は鞆から水筒を取り出して、コップにお茶を注ぎ俺に渡す。

「ありがとう」

俺はお茶を飲む、喉が潤う。

さて、次は……。

「……」

やっと、危険物を食べおえたぜ。後はサラダだけだな。俺はサラダを口に運ぶ。

「どうだろうか？」

「普通に上手いよ」

「そうか……良かった」

残りのサラダを食べる。

「ま、まさかこれは！？」

口に広がる圧倒的な苦味と、不快な食感。

俺は正体を確かめるために吐きだした。

頼むから、俺の勘違いであってくれ！

「な、なぜ全人類の敵が……」

「何時からピーマンが人類の敵になったんだ？」

「人類が生まれた時からの敵だろ。こんなの食える訳がない、JK」

なのに、ソレを食べさせるなんて……智代は俺に何か恨みがあるのか？

「ピーマンは健康に良いんだぞ」

だから、何なの？

「他で補えば良いじゃん」

「好き嫌いはよくないぞ。第一、私が料理作ったら食べてくれる約束じゃないか」

「ぐぬぬ……」

アレは料理じゃない！

とは、流石に言えず……俺は我慢して敵を食べた。

やっと、全て食べ終わったぜ。

「ごちそうさま」

俺頑張ったよね？ もう、ゴールしても良いよね……。視界が全て真っ白に染まり、全身から力が抜けていく。

視界には何故か見覚えのある、天井が映る。

だから、ここが保険室だと分かる。

何故わかるのかって？

……察しろ。

視界に天井が映るということは寝ている可能性が高いな。

今までの状況を考えて俺は気絶していたと推察出来る。

「良かった……目が覚めたんだな。急に気絶したからびっくりしたんだぞ」

言うまでもないが……原因は間違いなくお前だからな。

無論、口には出さないがな。

「その……また弁当を作ってきたら食べてくれるだろうか？」

だが、断わる。

「と、当然だろ」

智代の顔を曇らせないためなら、どんな苦難も受け入れると誓ったからな。

誤解するなよ、俺はMじゃない！

愛だよ、愛。 視点変更

今は授業中だ。

正直かなり眠い。昨日寝てないからな。

もし、睡眠が許されるなら私は直ぐに爆睡するだろう。

だが、残念ながらそれは叶わない。

休み時間を利用して保険室で寝れば良いのだが……もし、ぐつちが訪ねてきたらと思うと……。

結局、ぐつちは訪ねてこなかったがな！ ……こんなことなら保険室に行けば良かった。

昼休み。

私はぐつちの教室に居る。

「弁当作ってきたぞ」

「マジ！？ 智代の弁当k t k r」

喜んでくれてる……頑張って作って良かった。

「開けて良い？」

「うん」

ぐつちは弁当の蓋を取る。

「……」

ぐつちが突然フリーズする。

「おい、大丈夫か？ しっかりしろ」

「やっぱり、夢じゃないのか……」

ぐつちはこの世の終わりみたいな顔をする。

「……うう、酷いぞ。た、確かに失敗作だが……そんな嫌そうな顔しなくても良いじゃないか」

眠いけど……喜んでもらいたくて頑張って作ったのに……。でも、失敗作だから仕方ないか。

「だって……」

「ふん、そんなに嫌なら食べるな！」

悪いのは、私だ。でも、眠いから今の私はかなり機嫌が悪い。だから……。

「誰も食べないなんて言っていないだろう!」

「……無理するな。これは私が食べる。失敗したのは私の責任だからな」

ぐっちは優しいから私を落胆させたくなくて無理してるんだな。

……でも、本当に無理しないで良いんだ。本当に本当だぞ。

「や、腹壊すから止めれ」

……わ、私の作った料理は危険物だったのか。

「……そ、そこまで言うか。いくら何でも酷すぎるぞ」

「や、智代は美人だから胃が繊細だろ? だから……」

「……」

び、美人? お世辞でも嬉しいぞ。

「それにコレは俺のモノだっ!」

「……嫌なんだろう?」

「うん、どう考えても危険だしね」

そうか……。

「ッ……だったら!」

私は弁当箱を床に叩きつけようとする。穴があつたら入りたいぞ。

「ま、待て! 人の話は最後まで聞けとならわなかったのか!」

「うるさい!」

「それでも、俺はソレを食べたい」

「え?」

「だって、ソレは智代は俺のタメに作ってくれたものだろう?」

「……うん。ぐっちへの愛を込めて作った」

沢山込めたぞ。

ぐっちは私から弁当を奪う。そして、卵焼きを口に運ぶ。
「……」

ぐっちは無言で噛み始める。

「どうだろうか？」

もしかしたら……。

「……個性的な味だな」

そ、それはどういう意味なんだ？

……。

「……そうか……不味いなら無理して食べなくて良いぞ」
やっぱり駄目だったか。

「でも、胸に何か暖かいモノを感じるよ。智代が俺のために頑張ってくれたのが何よりも嬉しい」

ぐっちの優しさが嬉しい。

「何か飲み物ないか？」

「暖かい日本茶ならあるぞ」

私は鞆から水筒を取り出して、コップにお茶を注ぎ俺に渡す。

「ありがとう」

ぐっちは喉を鳴らしながらお茶を飲む。よっぽど喉が渴いていたのだろう。

「……」

ぐっちはサラダを口に運ぶ。

「どうだろうか？」

「普通に上手いよ」

「そうか……良かった」

ぐっちが残りのサラダを食べる。

「ま、まさかこれは！？」

ぐっちはピーマンを吐きだした。

「な、なぜ全人類の敵が……」

「何時からピーマンが人類の敵になったんだ？」

「人類が生まれた時から敵だろ。こんなの食える訳がない、JK」

JK……誰かの名前か？

「ピーマンは健康に良いんだぞ」
だから、食べる。

「他で補えば良いじゃん」

「好き嫌いはよくないぞ。第一、私が料理作ったら食べてくれる約束じゃないか」

約束を破るのか？

「ぐぬぬ……」

ぐっちは残りの料理を無言で食べる。

「ごちそうさま」

そう言っでぐっちが何故か気絶した。

私はぐっちを保険室に運び、ベットに寝かせる。

数分後……。

「良かった……目が覚めたんだな。急に気絶したからびっくりしたんだぞ」

本当にびっくりしたんだからな。

「その……また弁当を作ってきたら食べてくれるだろうか？」

ぐっちに喜んで貰えるような料理を作りたいんだ。だから……暫くは大変だと思いが付き合っで欲しい。

「と、当然だろ」

良かった。頑張っで料理作るからな！

因みに彼女の料理の腕が上がるまで数カ月もかかることになるのは内緒の話だ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8763m/>

もう1つの智代アフター

2011年2月3日00時40分発行